博　多　13

—博多遺跡群第36次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第228集

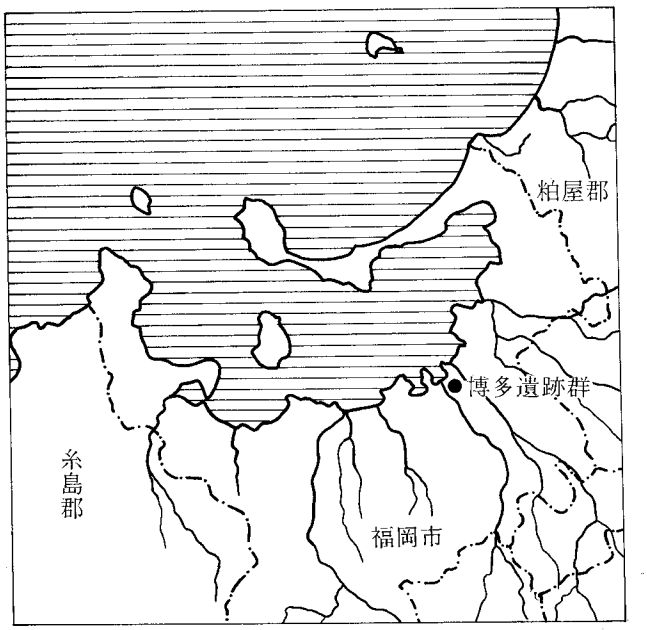
1990

福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多　13

—博多遺跡群第36次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第228集



1990

福　岡　市　教　育　委　員　会

1．博多遺跡群第36次調査地点第２面全景（北東より）

2．第５面甕棺検出状態（北より）

3．井戸ＳＥ56出土吉州窯産黒釉玳玻瓶

序

福岡市は古くから大陸文化の窓口として栄えてきました。

市内にはそれを示す多くの埋蔵文化財が残されています。

その中で博多遺跡群は各時代を通じて大陸との交渉や国内流通を示す中心的な遺跡です。

現在もＪＲ博多駅と博多港をひかえた都市として発展を続けています。

本書はそうした都心部での建物建築の事前調査であり、第36次調査の概要を報告するものです。

本書が文化財の保護と理解を深める一助となれば幸いです。

発掘調査から資料整理を通じてご協力をただいた関係各位に、心から感謝を表する次第です。

平成２年３月

福岡市教育委員会

教育長　佐　藤　善　郎

例　　言

1．本書は博多区祇園町42番地他７筆の建物建築に伴う事前調査として1987年８月５日から同年10月15日に実施した、博多遺跡群第36次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は福岡市教育委員会が主体となり実施した。調査組織は以下の通りである。

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

課　　長　柳田純孝

第２係長　飛高憲雄

庶　　務　松延好文

調査担当　吉留秀敏

調査補助員　城戸康利、上方高弘、李弘鐘・土井基司・古野徳久・太田睦（九州大学）、中村清治・牟田裕二・川野圭史・綱崎良彦・大塚恵治（福岡大学）、那須利治（筑波大学）、屋山洋（日本大学）、浜田学（別府大学）

調査指導員　亀井明徳（専修大学）

3．本書で使用した遺構実測図は吉留秀敏と調査補助員が、また、遺物実測図は亀井明徳・吉留秀敏が作成した。

4．本書で使用した遺構・遺物の写真は吉留秀敏が撮影した。

5．本書で使用した図面の整図は、山口譲治・吉留秀敏・城戸康利・牟田裕次・山口朱美・石田晴美が行った。

6．本書で使用した方位は磁北である。また、土師器の分類は大宰府史跡で使用している名称を、陶磁器については『博多出土陶磁分類表』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊）の分類を、それぞれ適宜使用した。

7．本書の執筆は、Ⅲ－３）、Ⅴ－２）を亀井明徳、Ⅳを本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）・成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）が、その他の章・節の執筆と編集は吉留秀敏が行った。

本文目次

Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．博多遺跡群第36次調査の概要……2
　1）遺跡の位置と環境……2
　2）調査の概要……3
Ⅲ．調査の記録……7
　1）弥生時代……7
　2）古墳時代……9
　3）古代～中世……18
Ⅳ．SK227出土の赤色顔料について……38
Ⅴ．まとめ……39

挿図目次

図1　博多遺跡群調査区位置図……1
図2　博多遺跡群と周辺の主な遺跡群……1
図3　博多遺跡群第36次調査地点周辺地形図……2
図4　近世遺構実測図……3
図5　古代～中世遺構実測図……4
図6　古墳時代遺構実測図……5
図7　弥生時代遺構実測図……6
図8　甕棺 SK320 実測図……7
図9　甕棺 SK320……7
図10　甕棺 SK319 実測図……8
図11　甕棺 SK319 321 322……8
図12　竪穴式住居跡 SC276 実測図……9
図13　竪穴式住居跡 SC276 出土遺物1……10
図14　竪穴式住居跡 SC276出土遺物2……11
図15　竪穴式住居跡 SC276 出土遺物3……12
図16　竪穴式住居跡 SC277 実測図……13
図17　竪穴式住居跡 SC277 出土遺物1……14
図18　竪穴式住居跡 SC277 出土遺物2……15
図19　竪穴式住居跡 SC277 出土遺物3……16
図20　竪穴式住居跡 SC278～280 出土遺物……17
図21　土壙 SK323 実測図……18
図22　土壙 SK323 出土遺物……18
図23　溝 SD224 出土遺物……20
図24　土壙 SK33 実測図……21
図25　土壙 SK33 出土遺物……22
図26　井戸 SE55 実測図……23
図27　井戸 SE55 掘方内出土遺物……25
図28　井戸 SE55 井筒B内出土遺物……26
図29　玳玻梅花文碗（鎌倉市、北条時房・顕時邸跡出土、鎌倉市教育委員会提供）……27
図30　井戸 SE56 実測図……28
図31　井戸 SE56 出土遺物……29
図32　井戸 SE66 実測図……31
図33　井戸 SE66 出土遺物……32
図34　井戸 SE70 実測図……35
図35　井戸 SE70 出土遺物……36

表目次

表1　井戸 SE66 出土の土師器計測表……34
表2　井戸 SE70 出土の土師器計測表……37

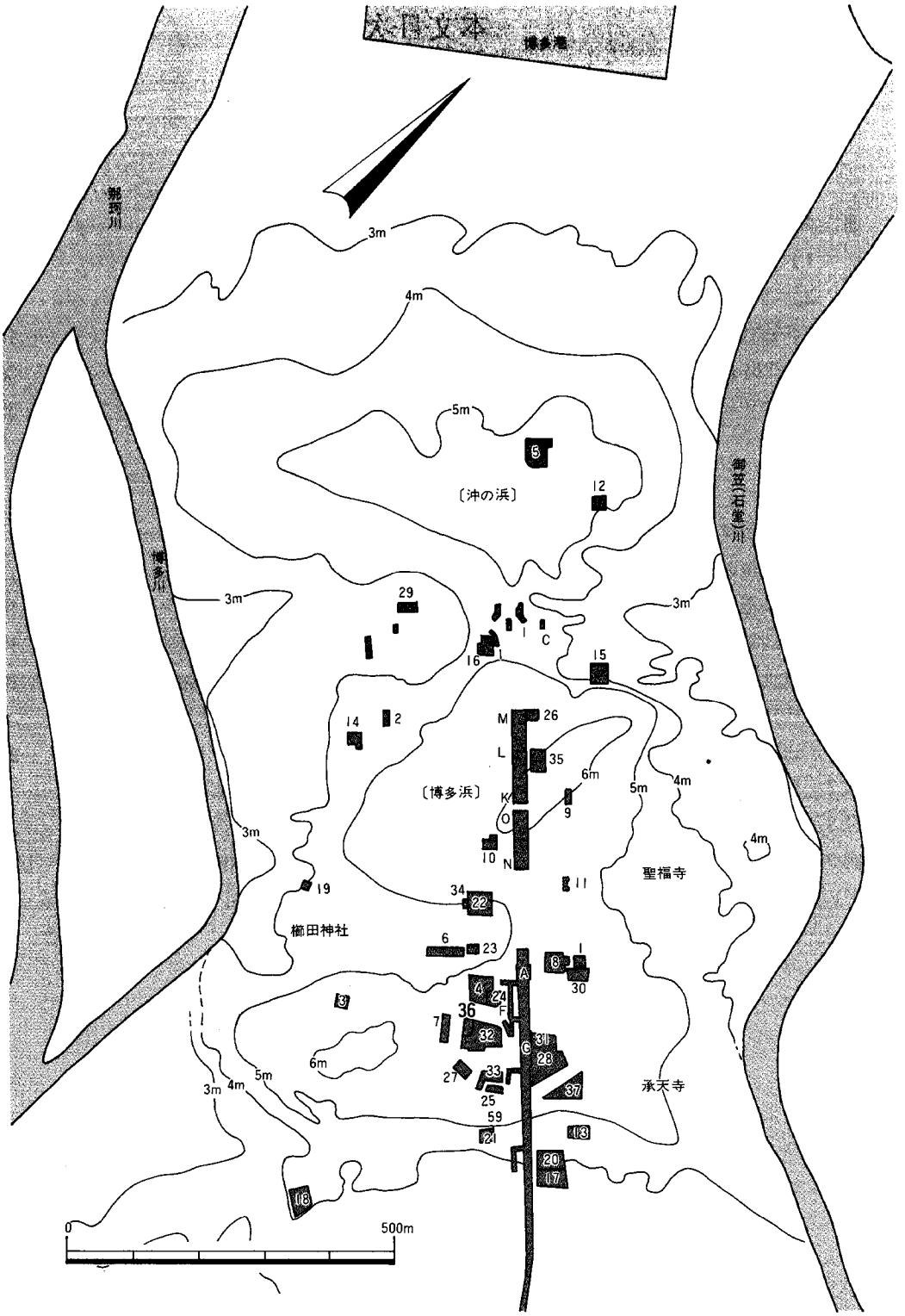


図 1　博多遺跡群調査区位置図

Ⅰ．調査に至る経過

1986年12月１日に株式会社マルコー（以下“甲”とする）より、本市に博多区祇園町42番地７筆内におけるビル建設に伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。申請地は周知の遺跡である「博多遺跡群」に含まれており、これを受けて福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下“乙”とする）では、同年12月９日に試掘調査を実施した。その結果、対象地内に遺構・遺物等の文化財の存在を確認した。そのため甲・乙両者は文化財保護に対する協議をもったが、現状での保存は困難であり、発掘調査によって、記録に残すという結論に達した。そこで1987年７月25日に甲・乙の間に調査および整理作業に関する委託契約を締結した。発掘調査は1987年８月５日から同年10月15日まで実施した。

遺跡調査番号	８７２５	遺 跡 略 号	ＨＫＴ－36	事前審査番号	61－2－252
調査地地籍	博多区祇園町42番地他７筆		分布地図番号	天神４９	
開発面積	644.9㎡	調査対象面積	644.9㎡	調査実施面積	332㎡
調査期間	1987年８月５日～1987年10月15日				

1．博多遺跡群　5．那珂遺跡群　9．井尻遺跡群　13．有田遺跡群
2．堅粕遺跡群　6．板付遺跡群　10．福岡城・鴻臚館跡　14．十郎川遺跡群
3．吉塚遺跡群　7．諸岡遺跡群　11．藤崎・西新町遺跡群
4．比恵遺跡群　8．五十川遺跡群　12．原遺跡群

図 2　博多遺跡群と周辺の主な遺跡群

Ⅱ．博多遺跡群第36次調査の概要

1．遺跡の位置と環境（図1・2）

福岡平野を北流して博多湾に注ぐ那珂川、御笠川（石堂川）は河口付近に三角州を形成した。また、玄界灘からの海流はこうした海岸線に幾重もの砂丘を造り、これらが複合して起伏の多い特異な砂州を形成している。現在はその最高所は標高6ｍ程度である。

博多遺跡群は上の二つの河川に挟まれた砂州上に立地している。遺跡の形成は遅くとも弥生時代中期前半に始まる。近畿系土器群で占められる特異な古墳時代前期の時期を経て、同中期には福岡平野で最大級の前方後円墳が築造されている。その後も集落は継続し、古代には官衙的施設の造営がある。そして、古代後期から中世には貿易財を発展基盤とし、著しい都市の発達をみせる。近世、近代にはやや衰えるものの、現代に至り、再燃しつつある。

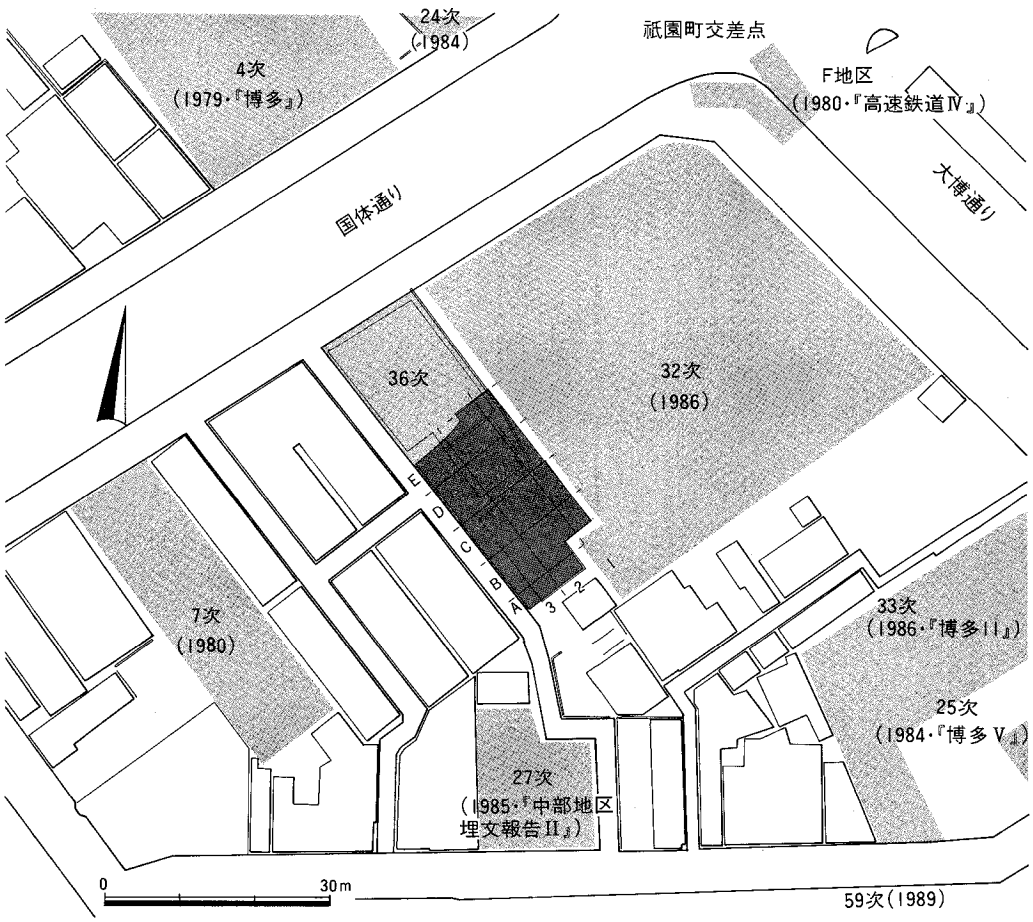


図 3　博多遺跡群第36次調査地点周辺地形図　（　）は調査年・報告書

2．調査の概要（図3～7）

今次調査地点は北側を国道202号線（通称国体通り）に面する間口約15.5m、奥行約45.0mの範囲である。調査前には銀行と病院の建物があり、その撤去後の調査である。なお、国道に面する銀行建物は基礎が深く、また地下室もあることから調査が困難であったので、旧病院敷地を中心に実施した。調査に際しては、敷地に沿った6m単位の測量用グリッドを設けた。

調査は土層関係を留意し、任意に遺構面を設けて進めた。最終的に5面の遺構面を調査した。ちなみに本調査区の地表の標高は約5.4mであり、第1面は標高約4.2m、第2面は標高約3.9m、第3面は標高約3.7m、第4面は標高約3.4m、第5面は標高約3.0mである。

第1面（図4）　主に近世の遺構を検出した。井戸6基、土壙12基、溝2条や柱穴多数がある。井戸のうち3基は瓦井戸である。溝SD 31、32は1.5m離れ並行している。それぞれ幅1m以下、深さ0.3m以下の規模である。やや蛇行しているが、方向はN－39°－Wであり、現在の町割りとほぼ共通している。土壙にはSK 10、13、17のように炭化物、スラグとともに近世磁器類、博多人形の破片や鋳型を多く出土するものがある。SK 03は2.0×1.8mの掘方を有する土壙であり、中心の1.0×1.0mの範囲に板材を横二段に張り、四隅に杭を打つ。貯蔵用の穴蔵と推定される。遺物の中で注目されるのに、SK 10出土の博多人形の破片がある。烏帽子の下部破片であり、内面に「…三壬寅年　吉日　太神　陶工正木宗七幸弘作」の線刻がある。博多人形の祖とされる宗七四代目の晩年の作品である。

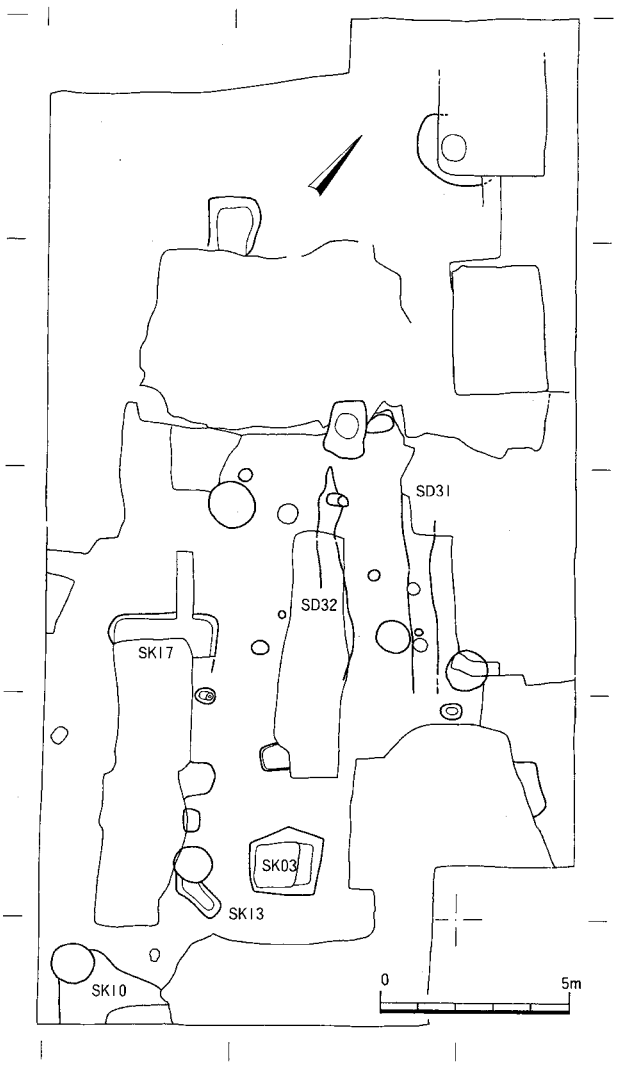


図 4　近世遺構実測図

第２面（図５、巻頭図版１）　中世の遺構を主に検出した。井戸30、土壙57、溝１条、柱穴多数を検出した。井戸は掘方が大きく、二段掘りで木製井筒を有するするものと、掘方が比較的小さく、素掘りのものがある。調査区の北側と南側に集中し、中央付近はやや少ない。土壙には性格の不明なものが多いが、SK 196、211、217、218 などは長さ1.0～1.6m、幅0.5～0.8mの長方形であり、床面が平坦で、流入埋土の状態から埋葬用の遺構とみられる。これらは調査区北側に集中して分布している。土壙 SK 84 からは土師器杯の底面に墨書で人面を描いたものが出土している。溝は調査区を斜めに流走しており、切り合う井戸は少ない。柱穴には根石の認められる例も多いが、その他の遺構が多いために建物の復元は困難であった。出土遺物は各遺構から多量に出土している。主なものとして、輸入陶磁器類、国産陶器類、土師器、瓦器、瓦類、石製品、金属器類、木製品などがある。主な時代は12世紀から13世紀初頭に限られるようである。

第３面　主に古代の遺構を検出した。溝１条、土壙６、柱穴多数がある。溝 SD 224 は第２面の SD 50 の直下で検出したもので、両者は一連のものと考えられる。溝の下面は基盤の砂層に達し、下面の甕棺が露出した。中世以降の撹乱のために調査区内の両端では検出が困難であった。土壙も断片的なものであり、直径1.5m以下で深さ0.3m以下のものが多い。何れも遺構の性格は不明である。SK 323 は調査区西壁に接して検出した。下位の竪穴式住居跡 SC 280 の覆土中に掘られ、蔵骨器か、鎮檀具と推定されるものである。柱穴は径0.5m以下のものが多い。古代の遺物としては須恵器、土師器、黒色土器、瓦類などがあり、８～10世紀に比定される。

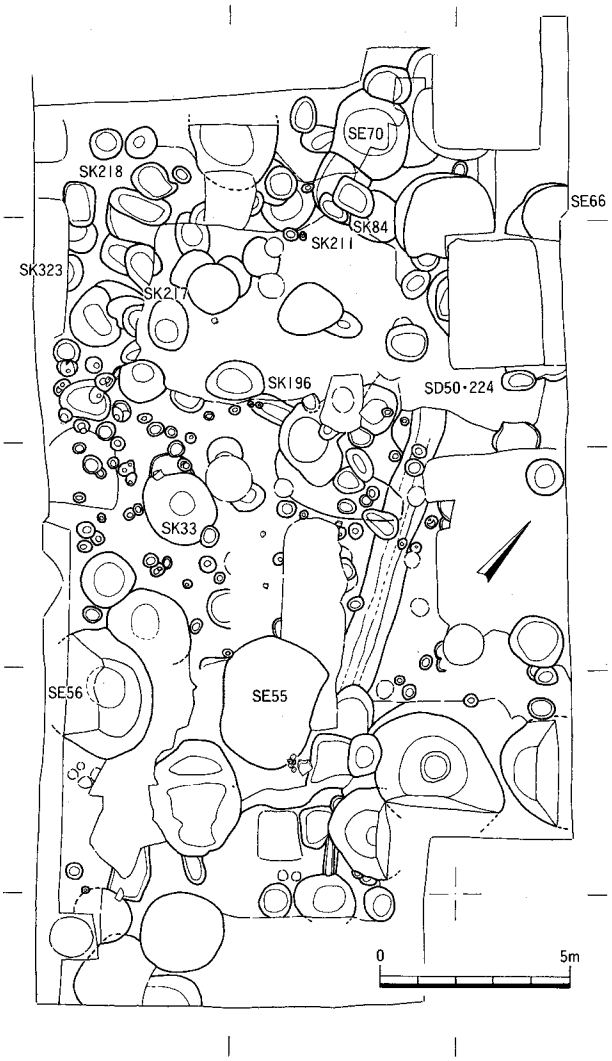


図 5　古代～中世遺構実測図

古墳時代（図6）　古墳時代前期の遺構を主とし、竪穴式住居跡5、溝1、埋葬主体1、土壙9、柱穴多数がある。何れも後出する遺構により切り合い、断片的な遺存状態を呈する。住居跡は隅丸方形を呈し、長辺6ｍを越える大型のもの SC 276、280と一辺5ｍ以下の小型のもの SC 277～279 がある。住居跡相互の切り合いは SC 276と278でみられるが、基本的に少ない。大型の住居跡は保存の良いところでは高さが0.8ｍに達する壁がある。住居跡内の床面や覆土中には多くの土器類が出土した。これらは近畿系の搬入土器が主体を占め、在地系の土器類は極めて少ない。土器類は近畿系でも大和南部地域の特徴をもつものが多く、直接的な関係を予測させる。こうしたあり方は博多遺跡群内の他地点の当該期遺構でも同様である。溝 SD 301と埋葬主体 SK 227 は、そのあり方から一連の墳墓をなすとみられる。SK 227 は SC 276 を切るが、切り合う部分の東側をさらに中世の井戸 SE 59 が切る。SK 227 は主軸がＮ－35°－Ｅである。掘方は長さ2.4ｍ以上、幅1.5ｍを測る。掘方内には2基の棺痕が並列検出された。南棺は長さ1.15ｍ以上、幅0.45ｍ、深さ0.15ｍあり、棺底は丸く、割竹形木棺を埋置したものとみられる。北棺は長さ1.67ｍ以上、幅0.37ｍ、深さ0.25ｍあり、棺底は平坦である。箱形の木棺を使用したとみられる。南棺には上部から流入した状態で玄武岩板石10点と鉄器1点が出土した。鉄器は刀子に類似し、表面に布痕が観察される。北棺には水成粘土塊が棺側に点在して検出された。蓋の目ばりとして使用されたものかも知れない。粘土には赤色顔料が含まれていたが、後述のように分析の結果ベンガラであることが判明した。SD 301 は幅2.4ｍ、深さ約0.5ｍの浅いＶ字溝である。遺構内からは古式土師器片が少量出土した。その形態や時期、これまでの調査成果からこの溝は方形周溝墓状の墳墓の周溝と推定される。

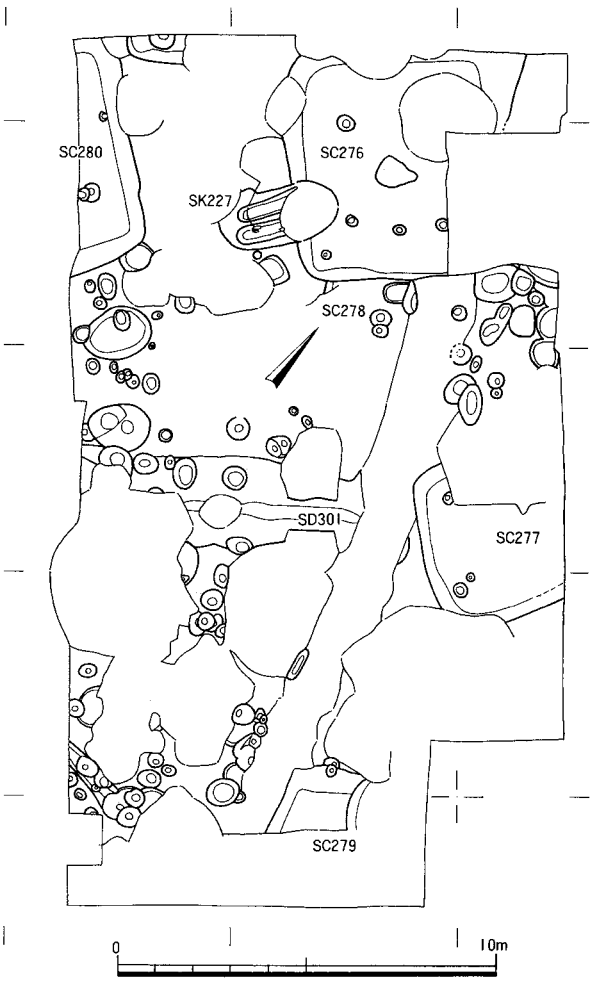


図 6　古墳時代遺構実測図

こうした墳墓は周辺の調査区でも検出されている。その規模は SK 227 から SD 301 底部まで6.9mを測ることから、一辺15m程度の方形をなすとみられる。その時期は共伴遺物が少ないことから明確ではないが、SC 276 を切ることや、第17、20次調査地点の成果から、古墳時代前期の範疇にあり、一帯の住居群の廃絶後まもなく墳墓群の形成が始まるとみたい。厳密な時期比定はこれからの課題である。この他に古墳時代の遺構として土壙や柱穴があるが、性格は明確でない。また、遺構を伴わないが、古墳時代後期の遺物も多数出土した。遺物には須恵器や土師器、埴輪、鉄鏃、銅芯金箔の耳環などがある。周辺に集落や墳墓の存在が予測される。

第5面（図7）　弥生時代の遺構を検出した。遺構は甕棺墓であり、成人棺3基、小児棺2基からなる。後出する遺構内に甕棺片や同時期の壺、高杯、甕などの土器片が混入しており、その他の甕棺や関連する祭祀遺構の存在も予測したが、検出されなかった。本調査地点の甕棺は、SK 318～321 がN－05°－Wの方位に並んでいる。また、一基離れて検出された SK 322 もその主軸を共通の方位にとる。狭い範囲のために明確ではないが、検出した甕棺は主軸間を約8mの距離で二列に並行して配列している可能性が高い。小児棺は主軸をやや東に振る。なお、博多遺跡群では甕棺墓は第22、24、32次調査地点および、地下鉄1号線店屋町・祇園町工区C区などで検出されている。このうち第24次調査地点と地下鉄1号線店屋町・祇園町工区C区において検出された甕棺は本調査区の甕棺墓の配列方向に一致する。ちなみに SK 318 から前者までの距離は約70m、後者までの距離は約110mを測る。また、第22、32次調査地点の一部は数基の甕棺墓が群集して検出されている。これらは先の配列状態には入らない別の一群として形成されたとみられる。

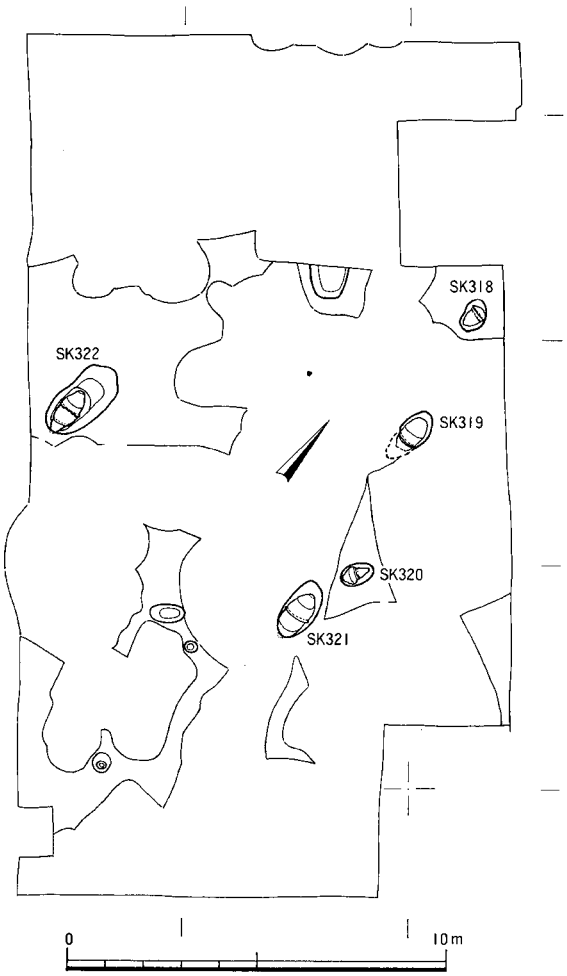


図 7　弥生時代遺構実測図

Ⅲ. 調査の記録

1）弥生時代(図8～11、巻頭図版2)

SK 319、321、322 は大甕による合せ口甕棺であり、成人棺である。また、SK 318、320 は甕と半裁した壺による合せ口甕棺であり、小児棺である。何れも型式的な時期差は少なく、相前後した造墓である。甕棺は土圧や後世の撹乱により破損したもののが多く、内部には土砂が充満していた。副葬品は何れからも出土していない。ただし、SK 319 と SK 321 からは人骨片が少量出土している。この人骨片は四肢骨の一部と推定されたが、一部は粘土化するほど軟質化しており、諸属性については不明である。

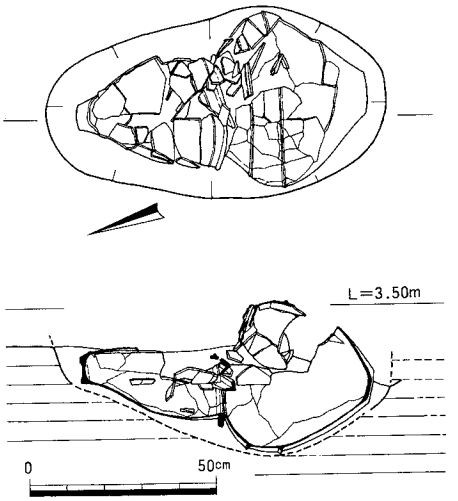


図 8　甕棺 SK320 実測図

SK 320　調査区中央南寄りにある小児棺である。甕棺は主軸をN－15°－Eにとり、SK 321 に向って掘り込まれた土壙内に埋置されている。土壙は検出面において長さ1.0m、幅約0.5m、深さ約0.3mの規模である。埋置角は水平より約5°傾斜している。棺全体の規模は長さ約0.78m、最大幅約0.47mである。棺の上部は調査以前に破損されている。中世の柱痕によるものとみられる。本甕棺の設置は墓壙掘削の後、口縁部から頸部を取り除いた壺（図9－2）を横位に置き、遺体埋置後、完形の甕（図9－1）を横位に合せ、埋め戻したと推定される。棺内に遺物の出土はなかった。使用された壺は胴部のみであり、現存高53.7cm、最大径44.9cm、底部径11.3cmを測る。内外面共に丁寧なヘラミガキを施している。甕は同時期の日常土器と共通した特徴をもつ。器高37.1cm、口径28cm、胴部最大径26.6cm、底径6.7cmを測る。底部は厚く、わずかに上げ底となる。外面ハケ、口

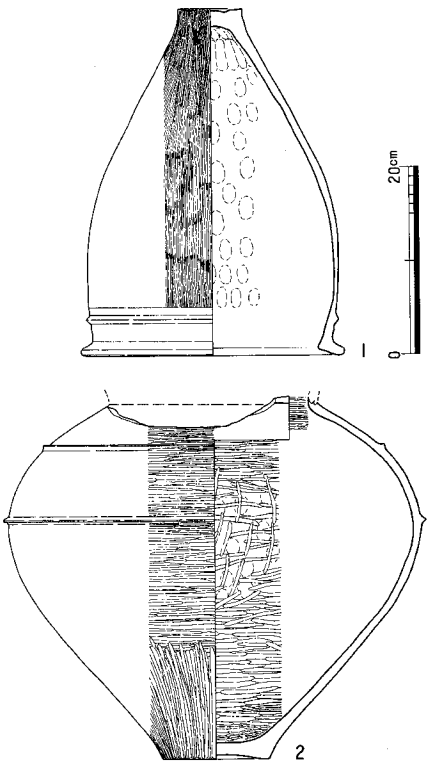


図 9　甕棺 SK320

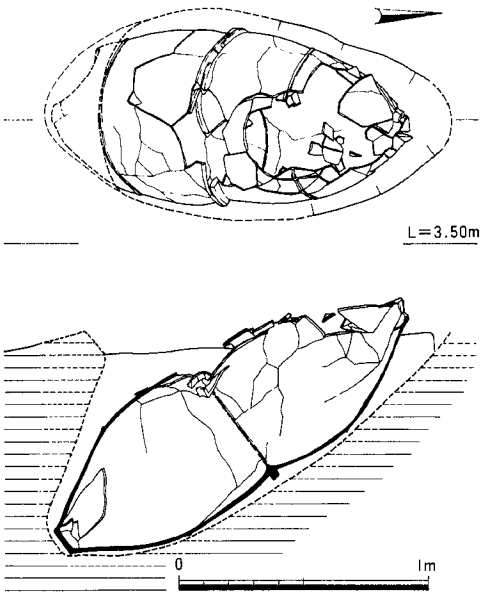


図 10　甕棺 SK319 実測図

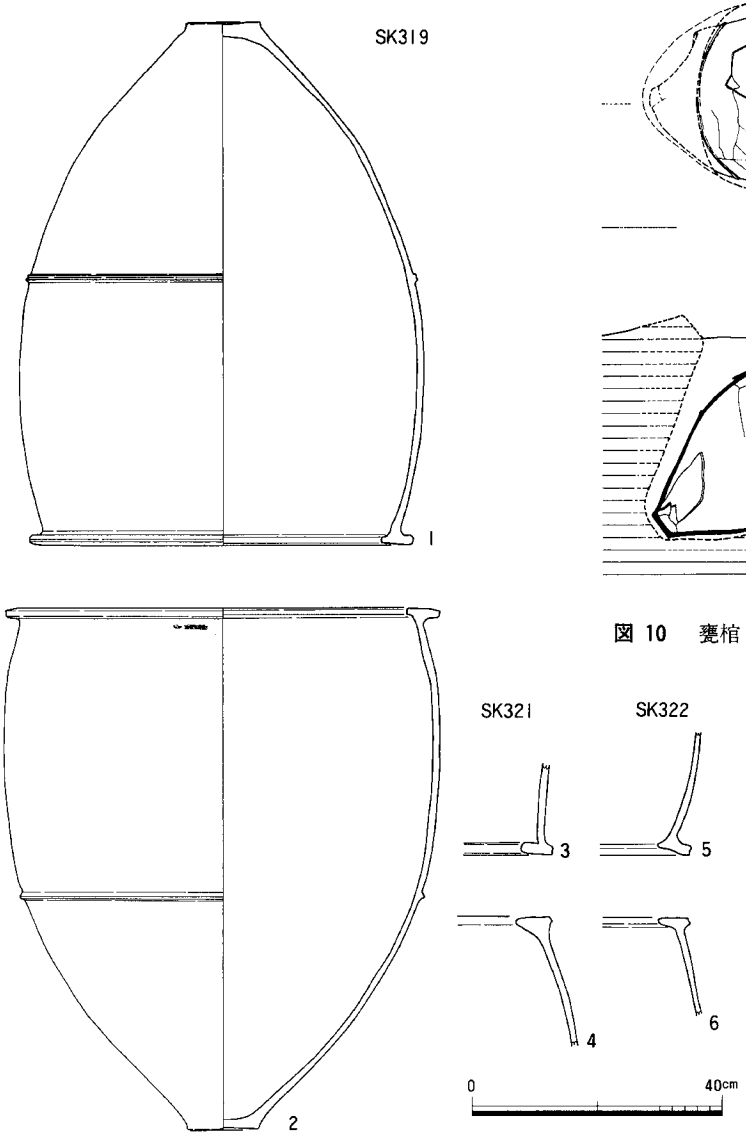


図 11　甕棺 SK319 321 322

縁と内面をナデ調整する。

SK 319　調査区中央東寄りで検出した成人棺である。棺の主軸はN－04°－Wである。上甕の上半部を破損している。墓壙は検出面で全長約1.4m、幅約0.8mを測る。深さは検出面から約0.9mを測る。棺の埋置角は水平より約34°を測る。下甕はやや抉り込んで据えられている。棺の規模は長さ約1.67m、幅約0.7m程度である。使用された甕は同じ特徴をもち、T字形の口縁と胴部下半に断面三角形もしくはM字形の突帯をもつ。上甕（図11－1）は器高84.3m、口径61.3cm、胴部最大径64.8cm、底径11.9cmを測る。下甕（図11－2）は器高84.4cm、口径69.6cm、胴部最大径70.0cm、底径11.6cmを測る。両者ともハケ調整後、内外面を丁寧にナデ調整する。

2）古墳時代

SC 276（図12～15）　調査区北側で検出された竪穴式住居跡である。中世の井戸が切り、北側は近代建物のために調査困難であった。平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は長辺約6.3m、短辺約5.0mと推定される。深さは保存の良い所で0.8mを測る。主柱穴は4本とみられるが、床面の壁際などに本住居に伴なう柱穴がある。住居中央の2.1×1.4mの範囲に焼土と炭化物の集中があり、炉とみられる。住居内埋土は上下に二分される。上部は黒褐色砂、下部は褐色砂である。遺物は住居床面と上部埋土中から出土した。床面出土には甕（1）、鉢（27、30、38）がある。これらは壁に沿って出土した。その他は住居の埋没過程でその中央

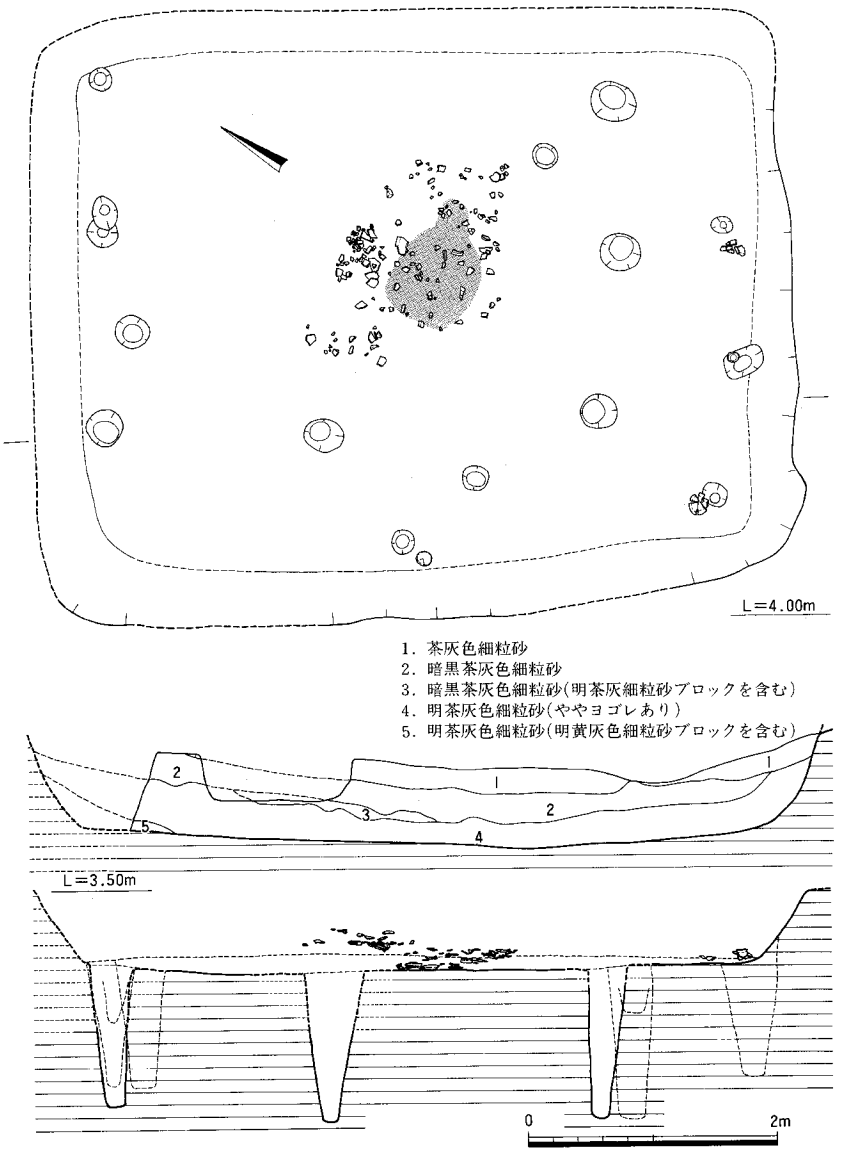


図 12　竪穴式住居跡 SC276 実測図

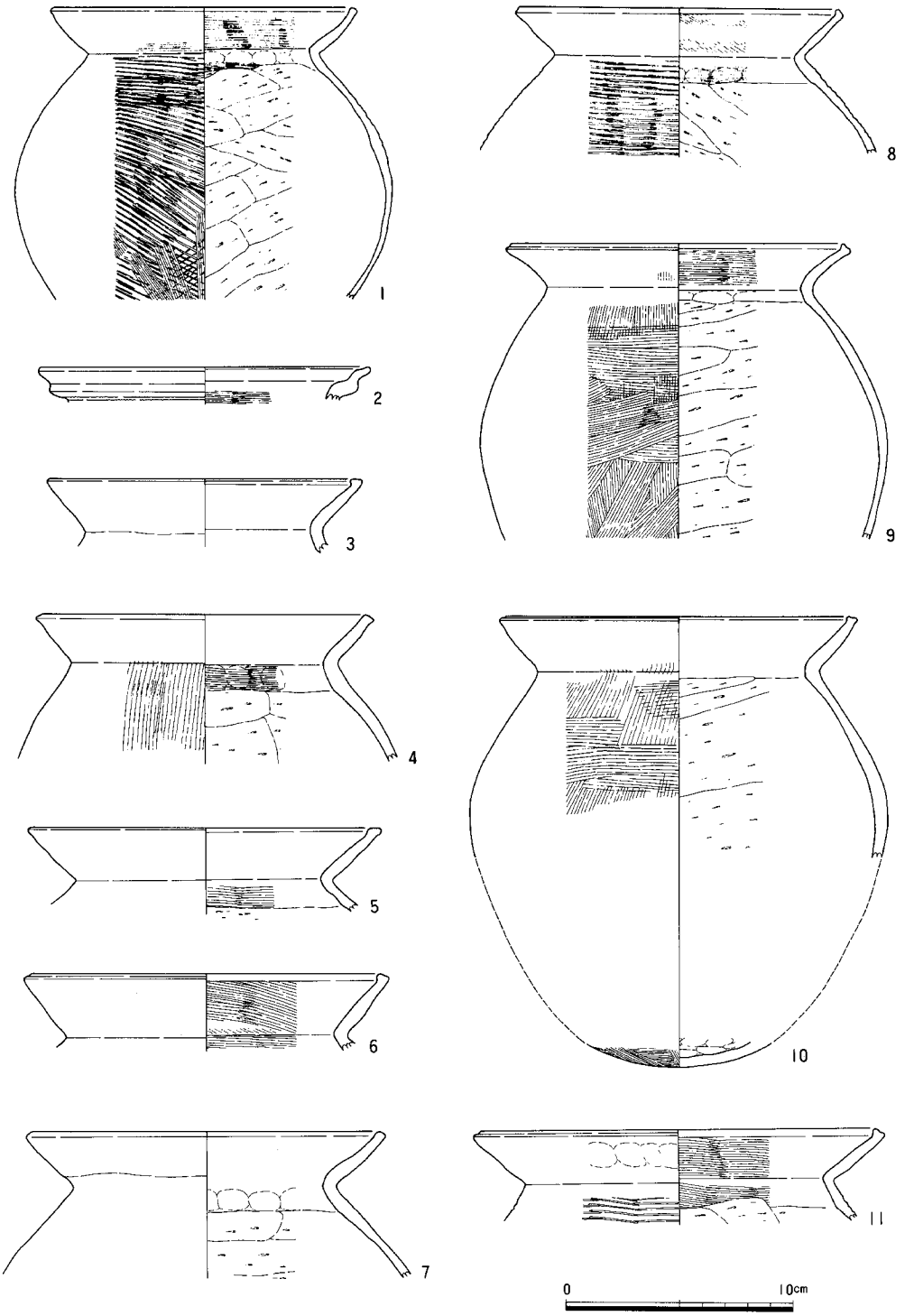


図 13　竪穴式住居跡 SC276 出土遺物 1

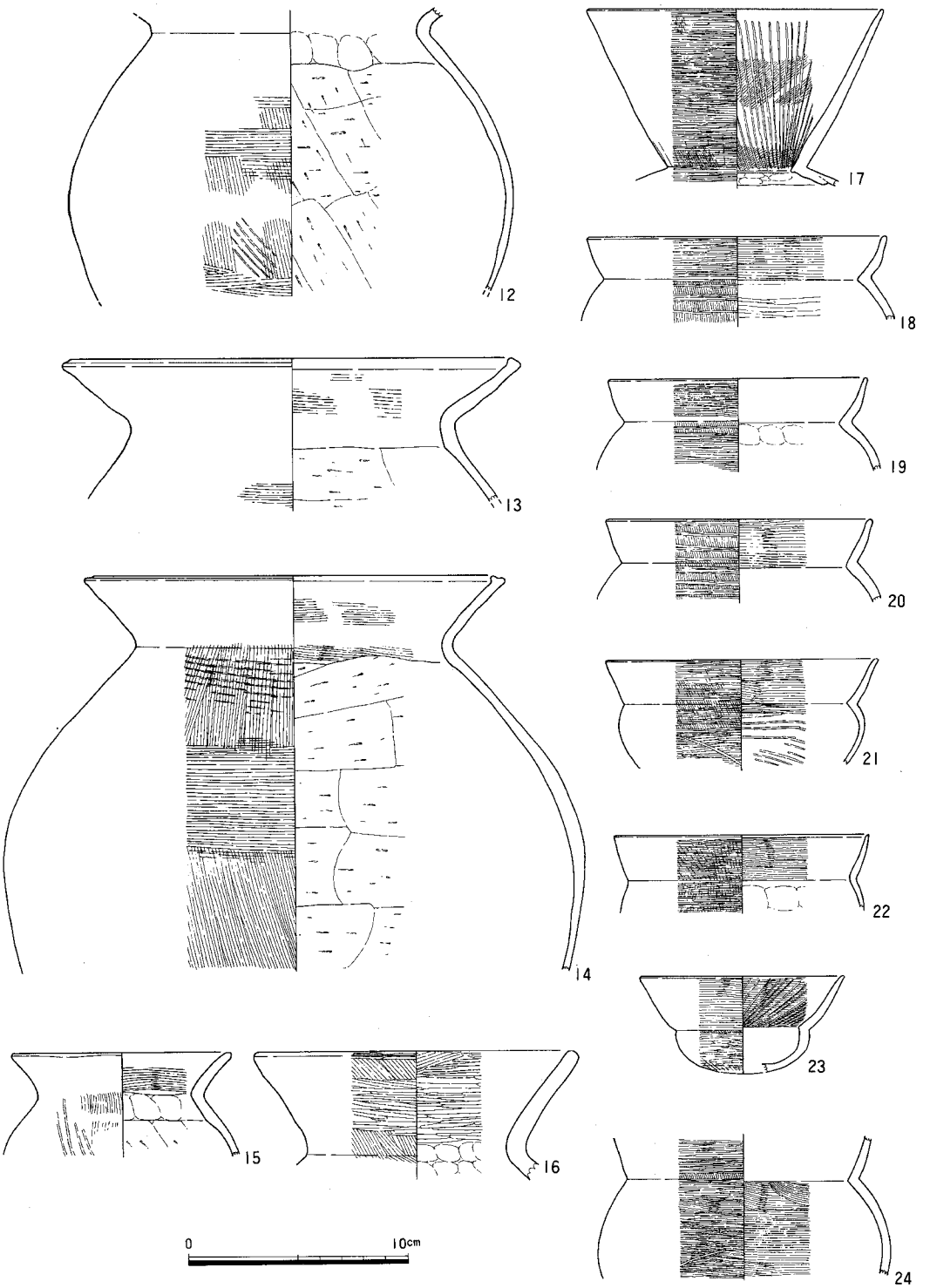


図 14　竪穴式住居跡 SC276出土遺物 2

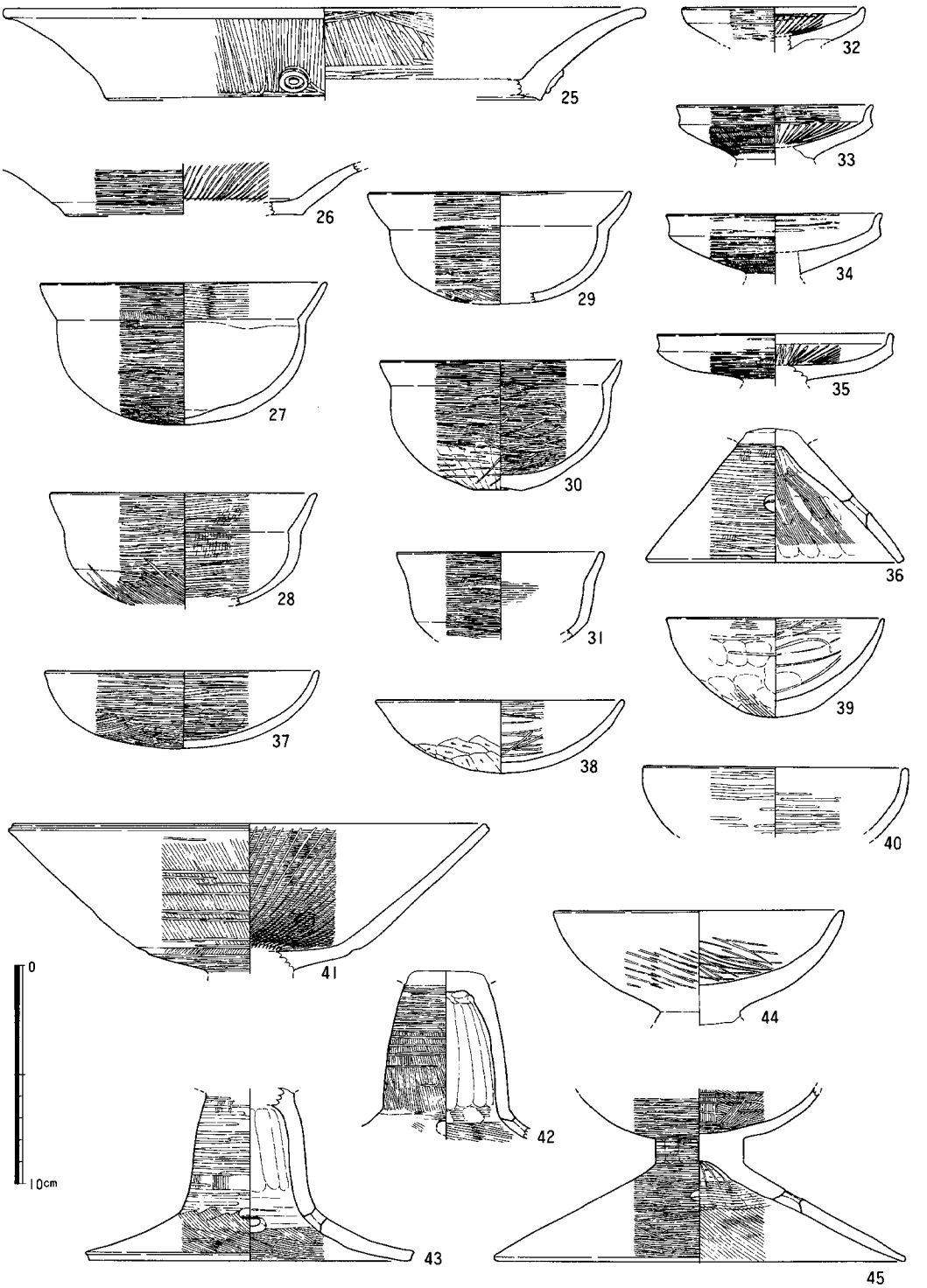


図 15　竪穴式住居跡 SC276 出土遺物 3

部に投棄状態で出土した。甕（2～14)、壺（15～26)、鉢（28、29～31、39、40)、小型器台(32～36)、高杯（41～44)、台付鉢(45)がある。鉢はミガキを丁寧に施すが、丸底(27)と小さな上げ底(30)がある。38は浅鉢で底部にヘラ削りを施す。甕にはa)外面にタタキを残すもの(8、11)、b)タタキ後(横)ハケ調整するもの(4、9、10、12～14)、c)ナデるもの(5～7)がある。これらは口縁端部を内部側につまみ上げ、平坦か、凹線状に仕上げている。b)のうち4、10はハケがやや荒く、器形にも特色がある。壺には広口壺(15～17)、短頸壺(18～22、24)、小型丸底壺(23)、二重口縁壺(25、26)などがある。鉢には深鉢(28、29、31)、浅鉢(37、39)がある。小型器台には口縁が短く終るもの(32)と外反するもの(33～35)がある。40は鉢、44は高杯としたが、台付鉢の可能性がある。

SC 277（図16～19)

調査区南側にあり、東壁に接して検出した竪穴式住居跡である。保存状態は良好でない。規模は略南北約4.6m、略東西約4.5mと復元した。深さは保存状態の良い部分で0.5mあり、北西側隅部はさらに0.1m一段下がる。主柱穴は4本柱と推定される。住居中央部に焼土がある。住居内埋土は褐色砂であり、レンズ状に堆積している。埋土上部から遺物が一括出土した。遺物は土器類であり甕（1～11)、壺（12～15)、鉢(16～18)、小型器台（19～21)、高杯（22、23)、大甕(24）がある。甕には外面にタタキ後下部ハケを施すもの(1)と外面タタキ後(横）ハケ調整を施すもの（2～8、10）がある。こ

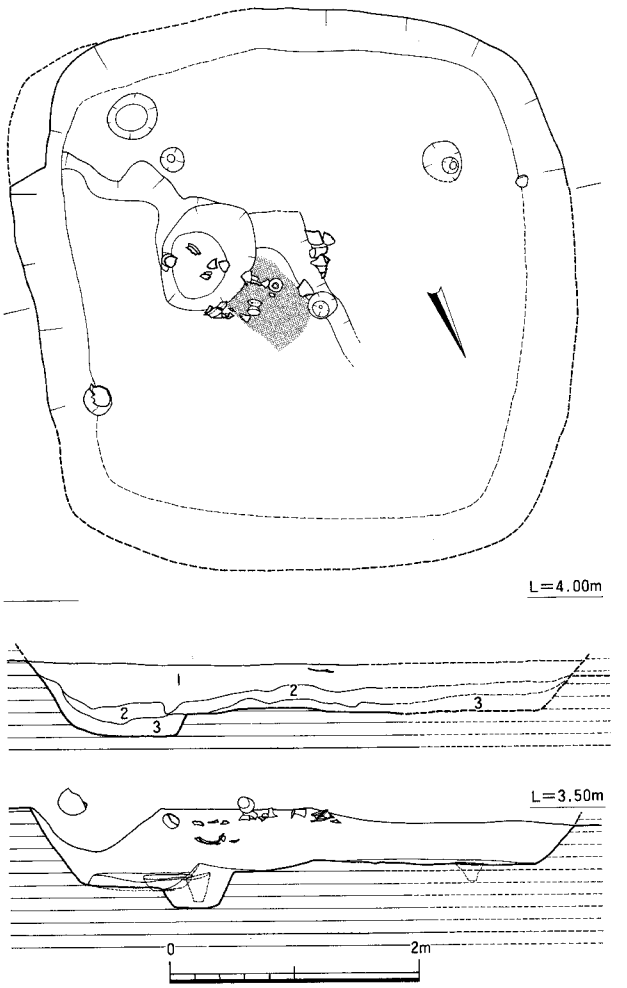


図 16　竪穴式住居跡 SC277 実測図

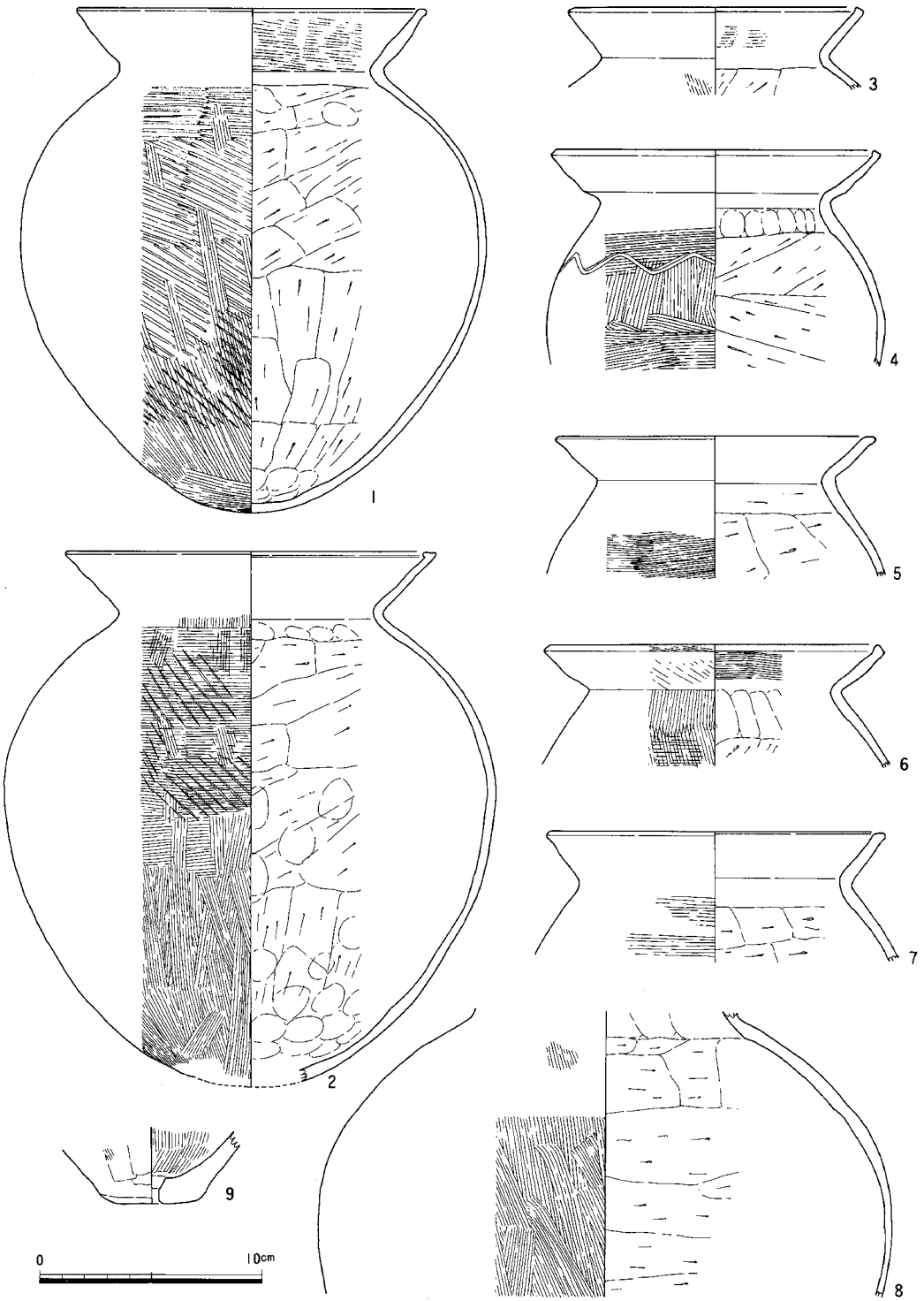


図 17　竪穴式住居跡 SC277 出土遺物 1

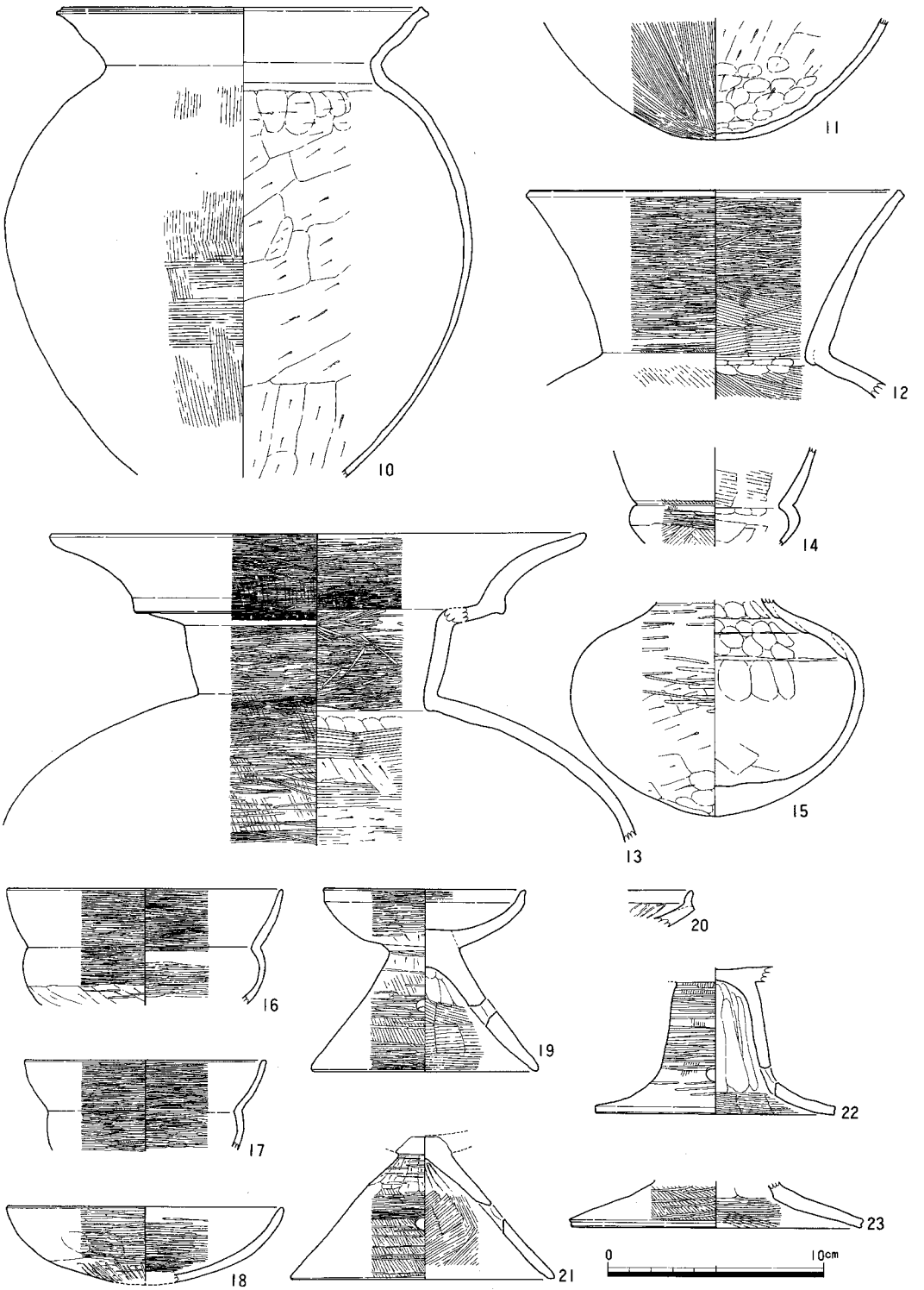


図 18　竪穴式住居跡 SC277 出土遺物 2

のうち、3、5、7、8、10は肩部にハケ後強いナデを施す。9、11は底部であり、9は丸みをもつ平底で、焼成前に穿孔を施す。壺には広口壺（12)、二重口縁壺（13)、小型丸底壺(14)、直口壺（15)などがある。

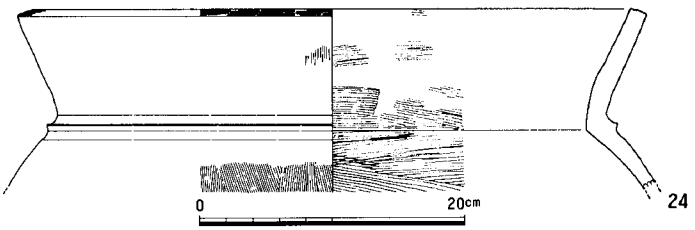


図 19　竪穴式住居跡 SC277 出土遺物 3

鉢には深鉢（16、17)、浅鉢（18）がある。大甕は破片からの復元であり、口径、傾きに若干の誤差がありうる。口径は約47.5cmであり、口縁は「く」字状に外反する。端部は平坦面を作りハケ調整を施す。くびれ部直下に断面三角形の突帯をめぐらす。内外面とも荒いハケ調整であり、口縁部から突帯付近までナデで仕上げる。これは本遺跡ではまれな在地タイプの遺物である。

SC 278（図20－1）　SC 276 の南側に接する。褐色砂の落ち込みが比較的広範囲に認められ、その下面が平坦であったことから竪穴式住居跡と推定した。しかし、平面形や構造については不明であり、SC 276 との切り合い関係も明確でない。埋土中から少量の遺物が出土した。1は二重口縁壺である。屈曲部を外横方向に引き出す。内外面ともにナデ調整で仕上げる。

SC 279（図20－2～5）　調査区南端で検出した。竪穴式住居跡の北西側隅部のみを検出した。隅丸方形とみられるが、規模、構造は不明である。立ち上がりは0.3mほど確認した。埋土は褐色砂である。また、本遺構を切る古代の柱穴（P-236）から完形の広口壺(5)が出土したが、これは本来本遺構に伴うものと考えられる。埋土中から少量の遺物が出土した。土器には甕(2)、壺(5)、鉢(3)、高杯（台付鉢）(4)がある。2は口縁端部を内面上部に強く引き出す。外面はハケ後ナデ、内面はヘラ削りを施す。

SC 280（図20－6～14）　調査区北側にあり、そのほとんどが調査区外に展開する。隅丸方形の住居跡であり、北東側の二隅が検出された。一辺は約6.5m、深さ0.8mを測り、SC 276と同規模の大型の住居跡と推定された。埋土は二分され上部は暗褐色砂、下部は褐色砂であった。埋土上部に遺物が出土した。土器として甕（6～8)、鉢（9～11)、台付鉢（12)、小型器台（13、14）がある。甕は口縁端部を内側にわずかに引き出し、外面をハケ調整するもの(6、7）と、口縁端部をやや拡張するものの丸く仕上げるもの(8)がある。何れも口縁内外面から肩部外面までを強くナデ調整する。鉢は半球形を呈し、内外面ハケの後、底部のみヘラミガキを施すもの(9)、深鉢(10)、浅鉢（11）がある。台付鉢は高台部のみである。小型器台は口縁部の外反がやや強く、屈曲部の稜がやや丸みをおびる。14は高杯の脚部の可能性もある。

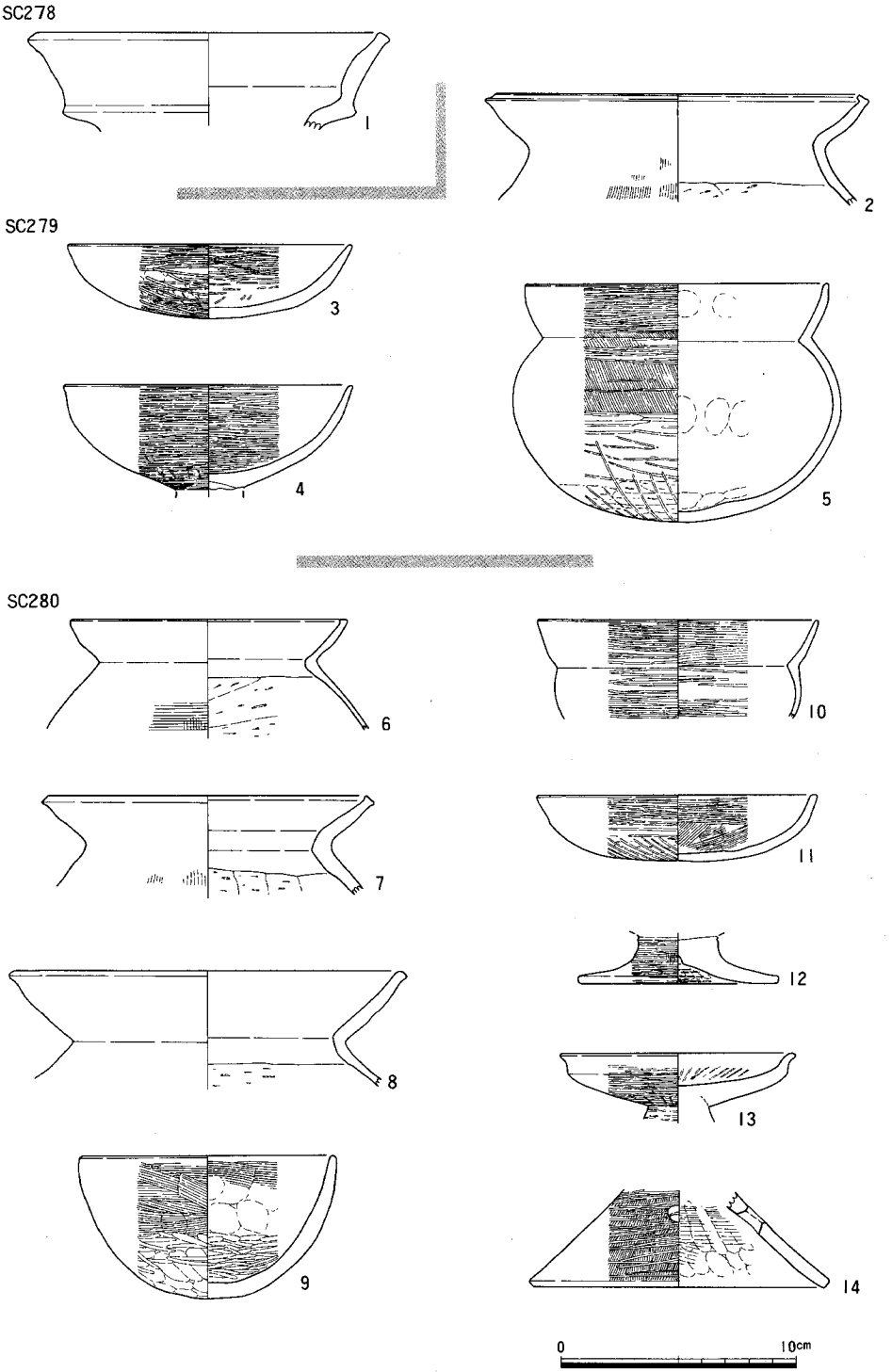


図 20　竪穴式住居跡 SC278～280 出土遺物

3）古代～中世

SK 323（図21・22）　本遺構は調査区北側の西壁に接して検出した。SC 280 の埋土中に掘り込まれている。遺構は下部でのみ確認したために上部は両方向の土層図で確認できた部分で復元した。これによると規模は南北約1.7m、東西約1.4m、深さ約1.2mと推定される。全体として急角度に下がり、尖り気味の底に達する。埋土は暗茶褐色土であり二分される。下部はやや暗色が強い。底から0.35m上位に遺物が一括出土した。須恵器、土師器、鉄鏃がある。床面西側に壺を直立させ、高台付椀を反転して据え置き、また東側に杯２を反転し、重ねて置いている。１は須恵器壺である。外面全体に淡緑色の自然釉がかかる。２は高台付椀である。器高4.5cm、口径12.8cmを測る。３，４は杯である。器高3.2～3.6cm、口径11.8cmを測る。５は鉄鏃である。全長8.7cm、幅3.1cmである。

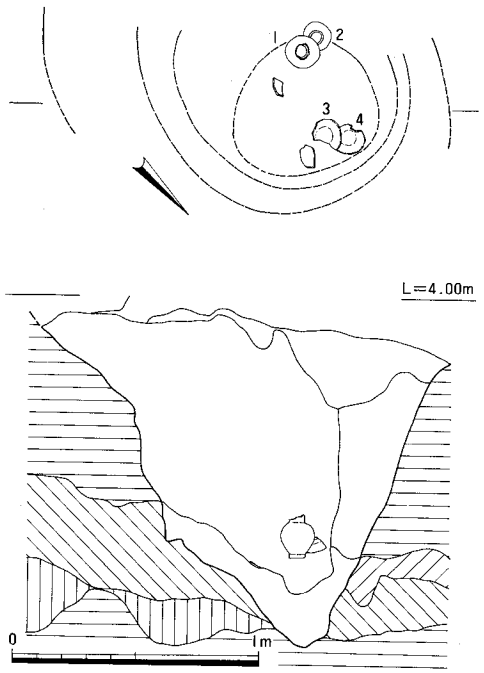


図 21　土壙 SK323 実測図

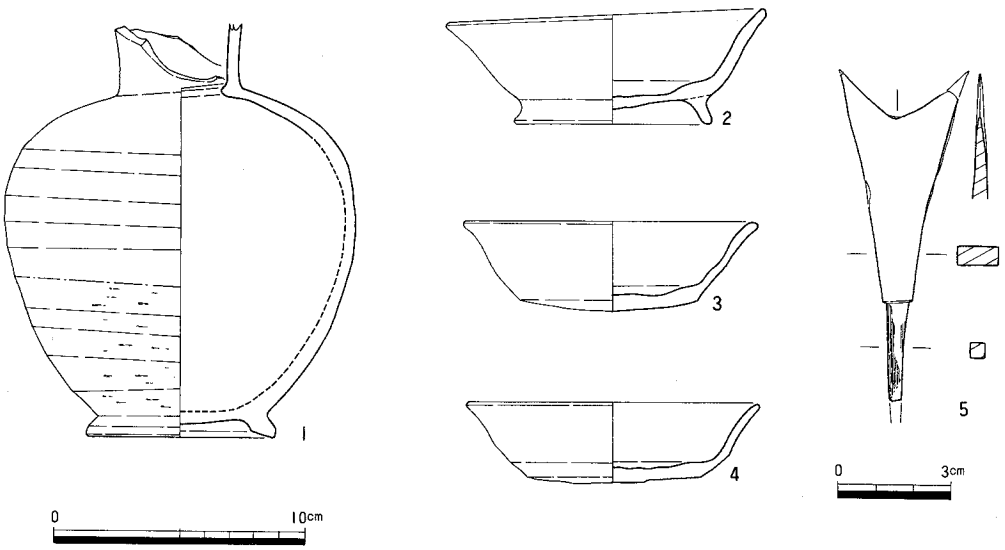


図 22　土壙 SK323 出土遺物

遺構の時期　土師器杯およびそれに高台を付けた器形の椀の形態からみて、9世紀第Ⅳ～10世紀第Ⅰ四半期に位置づけられる。

溝 SD 50・SD 224（図5）

この2本の溝は、調査区をほぼ南北に流走する一連のものであり、SD 50は第2面（標高約3.9m）で、SD 224は第3面（約3.7m）で各々検出した。流走方向は厳密にはN－22°－Wを示し、第17・20次検出のSD 529・466と方向が一致している。SD 50は幅約1.1m、深さ0.3mのV字溝である。これに対し、SD 224は少くとも3回の掘りかえが認められ、しだいに東側へ移動している。その規模は各段階で幅約1.8m、深さ約0.5mを測る逆台形を呈する。

出土遺物（図23）　この溝中からの出土遺物は、9世紀から12世紀初めまでにわたっている。

須恵器のうち杯蓋は1と9で、1は小片であるが口径12.8cm、天井部をヘラ削り後ヨコナデをしている。10は口径19.2cmと大形杯の蓋であり、黒色によく焼きしまり、返り部分の成形は鋭角につくる。2は杯身で、口径13.0cm、高さ3.2cm。腰の部分にケズリがみられ、外底は未調整である。3の杯身は暗い小豆色を呈し、胎土中に金色砂を含み、口径17.2cmをはかる。4は口径18.4cmの皿、外底にコテ状のキズがみられる。5～7は高台を付けた杯身で、いずれの高台も体部側に近く、低い形である。7は焼成がやや悪いが、他は良好である。8の杯身は高台に特徴をもつ形で黒灰色を呈し、内底中央にヘラ描文字がみられる。上、下を欠損しているが、漢字2字分と考えられ、図の左端を上にして「廿四」と判読できる。これら須恵器は9世紀前半の特徴をもっている。

つぎに土師器は、すべてヘラ切り放しであり、糸切りは一片も認められない。10、11は小皿aであり、11の口径は10.6cm。板状圧痕をもち、11世紀前半と推定する。10の口径は9.0cm、高さ1.5cmをはかり、12世紀前半。12の丸底杯もこれとほぼ同時期と考えられ、内側面に凹線、外面にも鈍い凹線がめぐっている。また灯火皿として使用されていたようで、口縁内側付近に灯芯の痕ではないかとみられる付着物があり、外面に油煙が付いている。14は椀cで、内面全体を瓦器椀と同じようにヘラ磨きしている。ほぼ完形ではあるが粗製品であり、外面に乱雑な磨き痕がみられ、内面に2次的な小穴が多数あり、さらに油煙が付着している。15は黒色土器B椀の底部で、内外とも漆黒色を呈し、精製土を用い、丁寧に調整されている。外面にミガキ、内底にも斜格子状にミガキ痕がみられる。11世紀代の製品とみられる。16は椀であり、内外ともヨコナデの調整がされているが、胎土は明らかに瓦質である。ミガキは認められない。17は土師器甕で、胴部内面は左下から右上へ粗くケズリ調整をし、外面はこまかく刷毛目調整をしている。土師器ではこの他に、把手付甕、竈片などを検出しており、これらは甕とセットをなして煮沸具として使用されたとみられ、付近に平安期の住居があったと推定できる。

遺構の時期　この溝は遅くも9世紀初めの時点までには開削され、その後次第に浅くなり、12世紀初めの段階では、ほぼ完全に埋没し、溝としての機能を果さなくなったと考えられる。

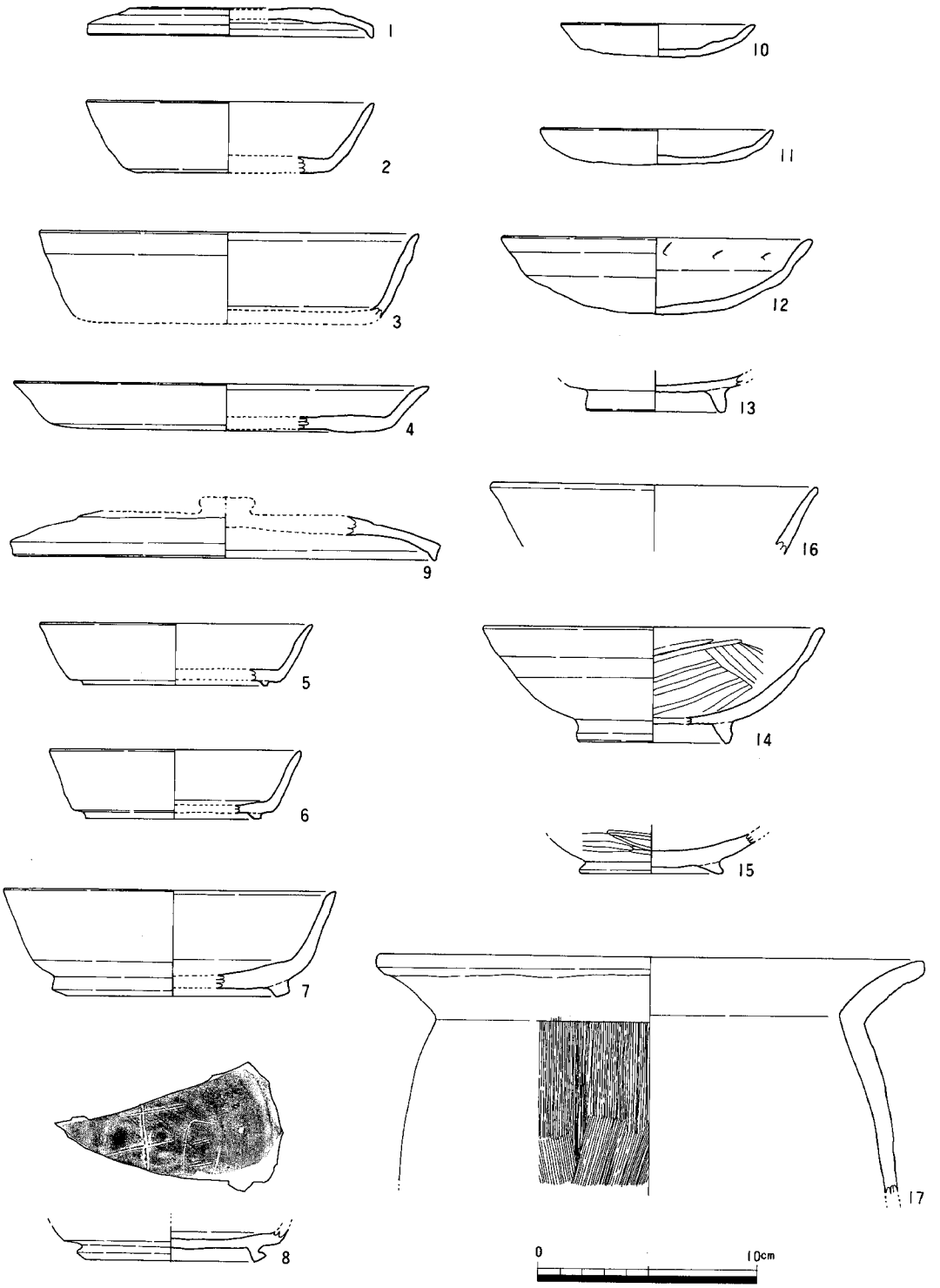


図 23　溝 SD224 出土遺物

そしてこの時点で溝の必要性が生じたため、新たにSD 50を開削したとみられる。

土壙 SK 33（図24・25）

調査区西側にある平面楕円形の土壙である。検出面は標高3.8mである。南北1.8m、東西2.1m、深さ0.7mであり、断面は逆台形を呈する。埋土は茶褐色の砂質土である。

出土遺物　土師器の出土量が少く、図示したもの以外で計測可能なものも少い。小片を含めて全てヘラ切りであり、糸切りは認められない。

1は小皿aで、口径9.2、底径7.6、高さ1.3cm、ヘラ切りで、外底に板状圧痕、内底中央はナデである。2と3は丸底杯で、口径15.4と14.1、高さ3.0と3.6cmである。ともに内面はミガキ調整、外底はヘラ切りで板状圧痕がみられる。4と5は小椀で、ともに一部を欠損するもほぼ完形である。4は口径8.2、底径4.4、高さ3.2cmをはかり内側面にミガキが施され、腰に段をもっている。高台内にヘラ切りで板状圧痕がみられる。5は、4に比べて口径が大きく、10.2cm、高さは3.2～3.4cmと低い。内外とも褐色を呈し、ミガキは認められず、ヘラ切りで板状圧痕である。6は椀cで、瓦器椀に類似したミガキが体部内外に認められる。口縁は直口で高台は低く、底径7.0、高さ5.5cmをはかるが、口径は遺存部分が小さく復元で16.6cm位である。

これら土師器の年代は、小皿a、丸底杯、椀cの法量などからみて12世紀第Ⅰ四半期、小椀はこれにより先行する11世紀前半期と考えられる。

瓦器7の椀は、底部を欠損し、口径は17.0cmをはかる。8は東海系鉢底部のみの破片で、内底中央は露胎であるが、その外側に灰白釉がみられる。外底は、糸切り痕が明瞭であり、短い付高台の基部に凹状の強いヨコナデがみられる。

貿易陶磁器のうちで注意をひくのは黒釉小碗9である。口縁を大きく外反する形で、胎土は一部は褐色であるが、大部分は黒色に近い暗灰色を呈する。釉は厚めにかけられ、内底近くに禾目状の縦細線がみられる。口唇はわずかに茶黒色を呈するが、その他は光沢をもち漆黒色である。口径10.2、高さ5.0cm。この形の類品は、博多築港線第4次調査のSX 32、33から検出されている。この土壙では糸切り土師器と龍泉窯系青磁が共伴し、およそ12世紀後半とみられる。これに対して、このSE 33では土師器は12世紀第Ⅰ四半期のもので、以下の白磁等もこれに符合する年代観を示している。したがって、この黒釉小碗も12世紀第Ⅰ四半期に位置づけること

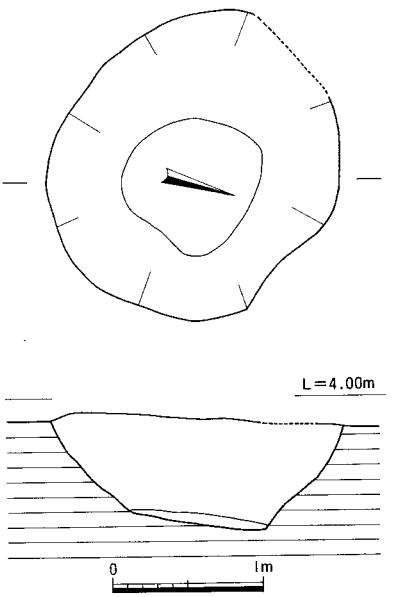


図 24　土壙 SK33 実測図

ができる。ただし、この遺構から土師器の出土点数が少いこと、井戸という遺構の性格を考慮すると、上記の年代観を強く主張することは現時点では慎重にし、今後の類例の増加をまつことにしたい。

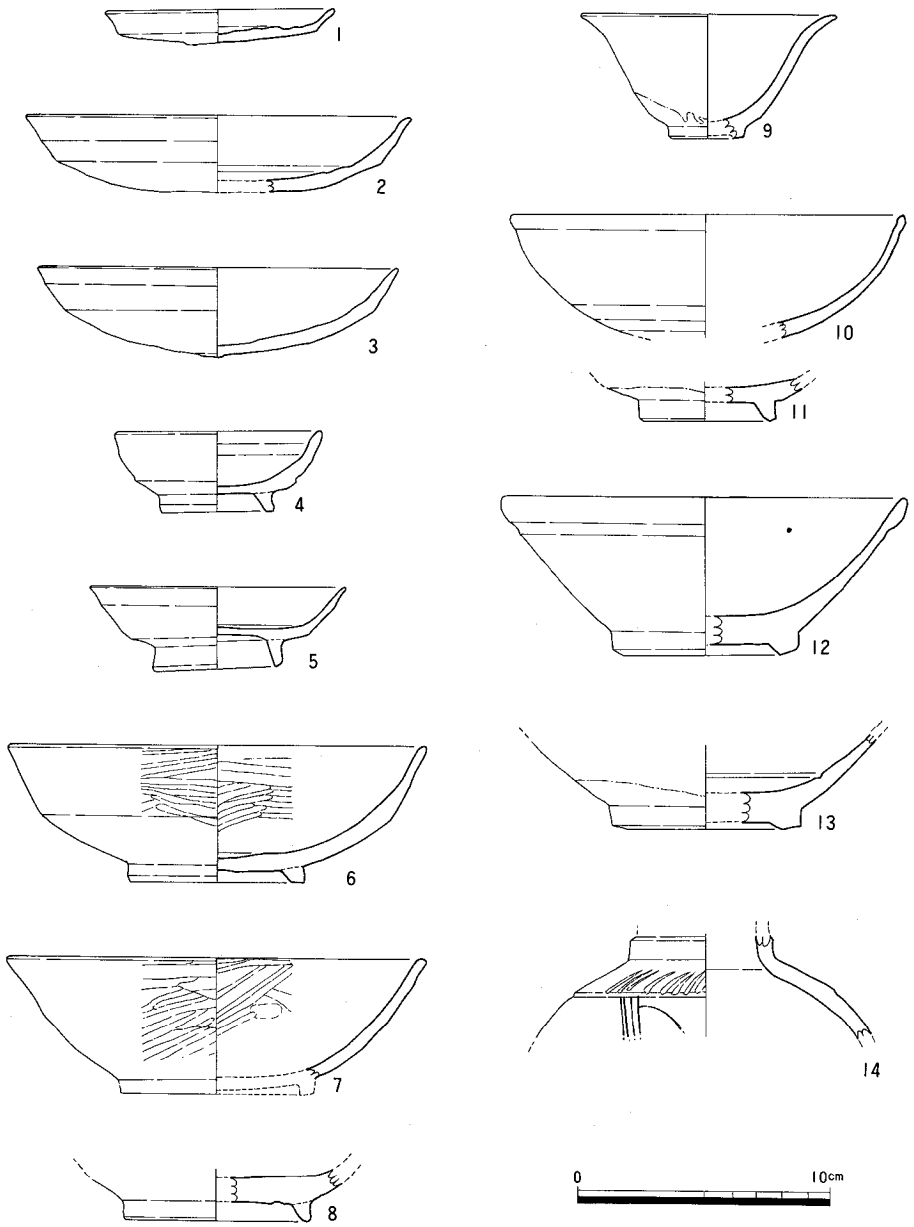


図 25　土壙 SK33 出土遺物

白磁碗では、10と11が碗Ⅱ類、12と13はⅣ－１、Ⅳ－２類である。12は内底に沈圏線（段）のないタイプである。体部下半に普遍的にみられる櫛状具による調整は、畳付まで反んでおり、しかもケズリやヨコナデ調整が行われた後に櫛状具による調整が加えられている。13は外底の中央部で径４センチの範囲に、焼台の焦げ跡がみられ、この部分が赤変し、黒色の斑点が付着している。これらⅣ－１と２は共伴するのがこの遺構の出土状況のようである。

14の青白磁壺は小片であるが注意される。頸部に直結する肩部分で、短い弧線文を重ねる帯文の下に、縦線で胴部を分割し、その間に弧線文がみられる。この類品は大宰府条坊27 SX 232、同234にある。

遺構の時期　12世紀第Ⅰ四半期を中心とした時期と推定できる。

井戸 SE 55（図26）

調査区中央南寄りで検出した。中央に工事用のＨ鋼が入る。平面楕円形であり、南北3.7ｍ、東西2.9ｍを測り、深さ2.4ｍで井筒を検出した。下面では南北２つの井戸掘方をみるが、上部の覆土では切り合いは無く単一層をなしていた。北側の井筒（Ｂ）は幅10cm程度の板を縦位に円形に並べたものであるが、湧水と壁崩壊のため、下部の調査を断念した。

掘方内出土遺物（図27）　土師器小皿ａで実測可能品は図示した２点である。ともに糸切りで板状圧痕を外底に、内底はナデ調整している。１は口径9.1、底径7.5、高さ1.1cmをはかる。２はやや大きく口径10.0、底径8.2、高さ1.2cmで、11世紀後半代の法量を示している。この他に小片があるが確実にヘラ切り放しの皿は認められない。

土師器杯ａは、小片で計測できないが、すべて糸切りで、外底に板状

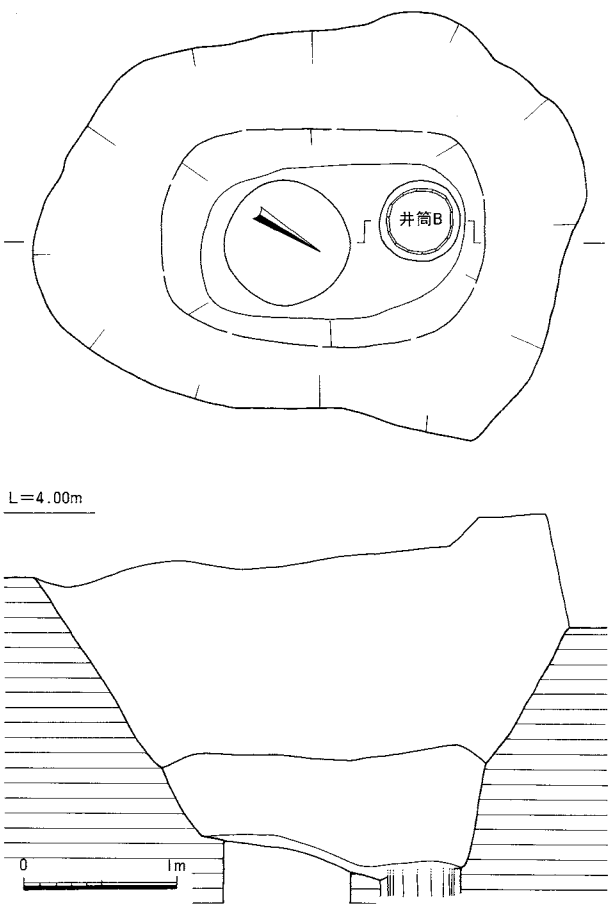


図 26　井戸 SE55 実測図

圧痕を伴うものである。図示した3、4はともに丸底杯で、ヘラ切り放し、褐色ないし赤褐色の精良土を用いている。3の内面にはミガキ痕がみられ、口径14.3、高さ2.9cm。4は口径14.5、高さ2.5cmをはかる。5は杯cで、赤褐色を呈し、外に開く高台をもっている。

これら土師器の様相は、一部に古い残存があるものの12世紀第Ⅳ四半期～13世紀第Ⅰ四半期と考えたい。

瓦器は数点を検出し、6は外面に指頭痕とミガキが不規則に混じるが、外面は間隔をあけてミガキがみられる。7の高台は内側を斜目に、外側は短く直立し、ミガキは内面が水平方向、外面もこまかくミガキがみられる。8は高台の高さ1cmで直立し、灰色の精製土を用い、底部は糸切りで板状圧痕がナデの下に観察できる。

貿易陶磁器のうち白磁では博多遺跡群で普遍的に出土する碗Ⅱ－2、Ⅳ－1・2、Ⅵ－1、四耳壺肩部片、平底皿Ⅲが各々数片ずつみられる。青磁は同安窯系碗Ⅰのみが出土し、同安窯系碗Ⅱや龍泉窯系碗・皿は認められない。

図示したものはやや特異な種類で、白磁碗9は、Ⅵ－1に近いタイプであるが失透性の白灰色釉がかけられ、ムラが多く、口端部は釉切れ状態のためか茶褐色に発している。胎土は灰褐色であり、全体に焼成不十分とみられる。器壁はうすい。10は青白磁碗の小片であるが、白色磁質土に光沢をもつ釉がかけられ、一部で青白色をみせる。高台は、直立し、総釉である。11は平高台皿でO類に属するものか。白磁胎で、光沢のある灰白色釉が底の近くにまでかかり、内底の釉下に沈線文を刻んでいる。高台状の短い削り出しがあり、外底は磨かれて平滑である。

陶器類については、A群Ⅰの四耳壺腰部片、C群捏鉢口縁部、四耳壺肩部などの通有品を検出した。図示した12は、水注の把手部分の小片であるが、表面に型押し（型造り）で斜格子文を入れ、オリーブ色の青磁釉がかけられている。胎土は灰色の半磁胎である。この種の小片はすでに博多遺跡群から出土しているが全形を知ることができない。13は、無釉の鉢で、蓋受けをもつ特異な形で、器壁2ミリ弱と薄く、淡褐色に発する精良土を用い、丁寧なヨコナデの痕跡をみせる。口径15.4cm。14は、粗胎の皿とみられる器形で、レンガ色に呈発する粗い土を用い、内面は灰色釉が薄くかけられ、ごく一部に越州窯青磁の釉調が観察できる。外面の半分は露胎のままである。外底は露胎で、円錐形に抉り取るように乱雑に削られている。15、16は、越州窯系の粗胎の壺である。15の口縁部には釉の上に灰砂が目痕として付き、内外ともに光沢のない暗緑色釉がかけられている。胎土は暗褐灰色土、口径は16.2cmをはかる。16はその底部とみられる碁笥底の器形で、15と同一の釉が外底を含めて総てにかけられている。

この他に「治平通宝」（治平＝1064～67年）1枚、鉄釘片1個を検出している。

遺構の時期　12世紀第Ⅳ～13世紀第Ⅰ四半期。

SE 55 井筒B内出土遺物（図28）　土師器のうち、杯aは小片で計測すら不可能であるが、全

て糸切りである。小皿ａは２片が計測可能で、１は口径8.6、高さ1.0cm、２は口径8.6、高さ0.9cmをはかり、いずれも糸切りである。この法量は13世紀前半と考える。

図示した１は、土師器であるが、淡褐色土の精製土を用い、器肉が厚く、ヨコナデが明瞭に

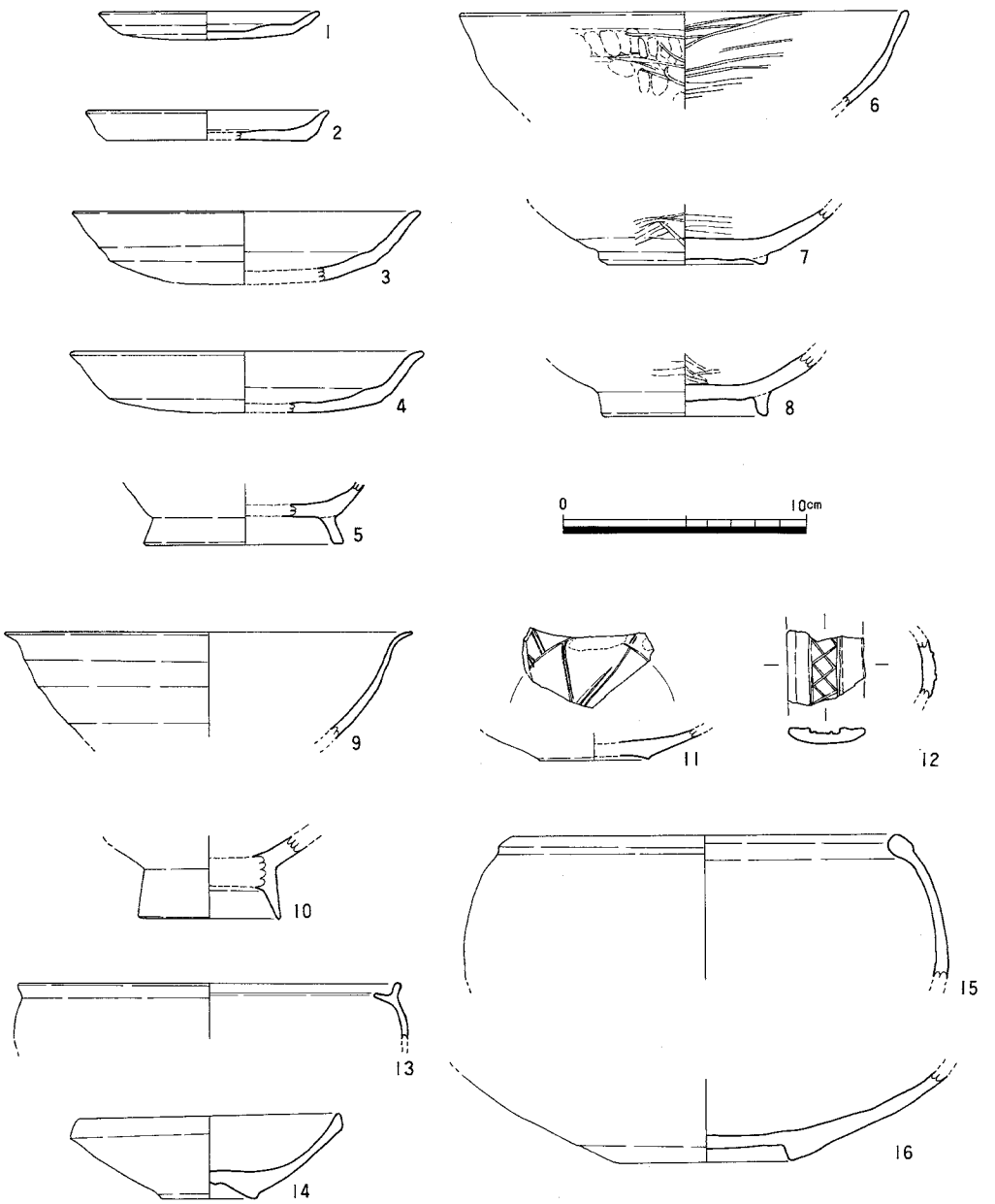


図 27　井戸 SE55 掘方内出土遺物

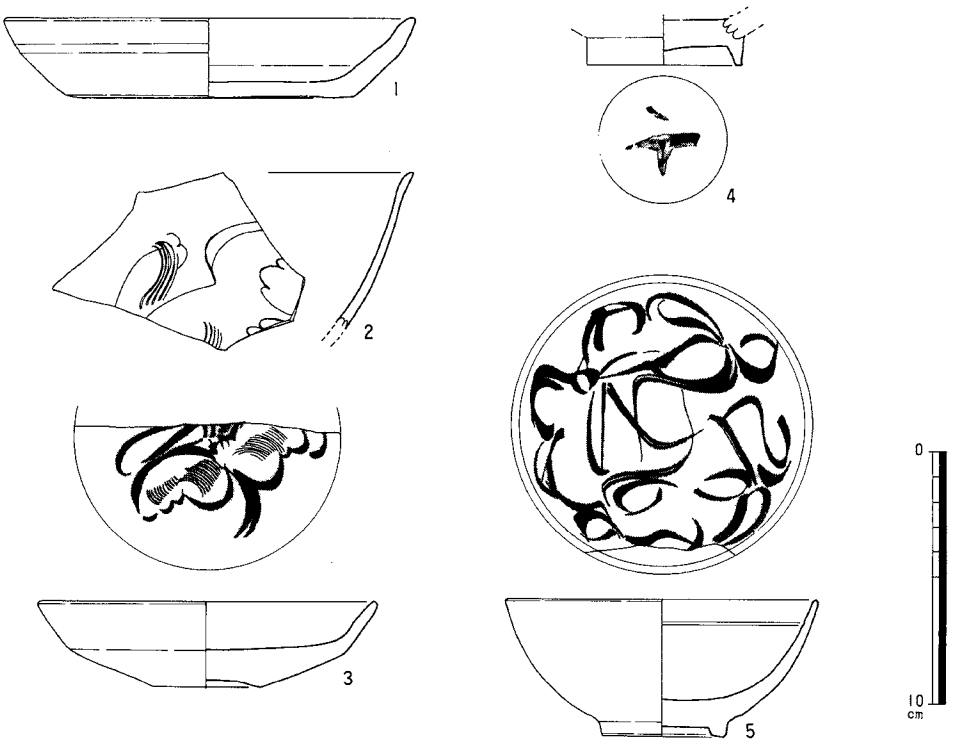


図 28　井戸 SE55 井筒B内出土遺物

残り、内底のナデ調整も強い。糸切りで、復元口径16.4cm、高さ4.1cmをはかる。

貿易陶磁器は、白磁Ⅴ、Ⅵ－１、四耳壺底部、青白磁輪花小皿、青磁では同安窯系碗Ⅱの各類を検出している。これらの他に次の４点について述べる。

白磁鉢２は、黄白色（クリーミィ・ホワイト）の釉を内外面にかけ、釉下に細刻線と櫛を用いて花文を施している。口縁付近に釉の溜りがみられ、こまかい氷裂文が全面に入り、光沢もある。胎土は純白ではなく、淡い褐白色を呈する。口縁端は２ミリ程残る状態であり、口径や傾きは正確に決められない。定窯白磁の倣製品と考えておきたい。４は白磁碗Ⅵとみられる通有品であるが、露胎の外底中央に墨書がみられ、「千」とも判読できるが定かではない。

龍泉窯系青磁は２点を検出した。３は平底皿Ⅰで半分が残る。この形の皿には大・小あるが、本品は大形に属し、口径13.4、高さ3.4、底径4.1cmをはかる。器肉も厚く、灰白色の磁質胎土で、暗緑色に発する青磁釉が厚くかけられている。外底は露胎で、削り放しのままで褐色を呈し、焼台痕とみられる焦げ跡が直径2.7cmの円圏状にみられる。内底の釉下施文は、蓮華文であり、片切彫りで比較的丁寧につくられ、空間を櫛文でこまかく充塡している。類似品に較べ

て型式的に古い感がする。5は青磁小碗で、透明度の強い淡青緑色釉が畳付までかけられ、一部は外底にまで及んでおり、ここにも焼台痕（径2.2cm）がみられる。内底の釉下片切り彫りの文様は、4本の蓮花文を中心から茎をからませて四方に表現したもので、簡略彫法ではあるが、手なれた手法であり、崩れた表現ではない。

遺構の時期　貿易陶磁器の組成と、土師器皿aとを合せて考えると、13世紀前半代と推定する。

井戸 SE 56（図29～31、巻頭図版3）

調査区南側の西壁に接して検出した。直径約3.4mの平面円形の掘方をもち、深さ2.3mで段のある2段掘りである。一段目は傾斜があり、2段目からはほぼ垂直に下がる。標高1.2m付近で棒状の板材を楕円形に並べた井筒を検出したが、湧水と壁崩壊のために掘り下げを断念した。

掘方内出土遺物　この井戸の出土品は少く、土師器は数片あるがいずれも小片であり、法量の計測はできない。また糸切りかヘラ切りかの判別も不可能である。

白磁碗は9のⅥ－1類の底部と、別に口縁部片がある。またⅣ類も検出しているが、いずれも口縁部であり、Ⅳ－1か2かは不明である。

青磁碗は10の同安窯系がある。底径5.0cm、高さ6.5cmであるが体部は2/5ほどの残存で、口径は14cm程度とおもわれ、小ぶりの碗である。施文は簡略化され、外面には特徴的な櫛描文はみられず、内面の櫛描文も簡便である。釉は緑黄色で黄味が強く、氷裂が細くみられ、無釉の高台部は黄褐色土がみえる。外底のケズリはほぼ平担である。

図示しなかった遺物として、いわゆる取瓶の小片がある。

11は吉州窯製の黒釉玳玻瓶の胴部下半の破片で、胴中位の1片はSK 55から出土し接合した。光沢のやや鈍い黒釉に、わずかに青味を帯びた白色の、いわゆる卯の斑（ふ）の藁灰釉が不規則にかけられている。畳付部分は二段に、かつ無雑作に削られ、褐色のざんぐりとした胎土を露わし、釉際は赤変している。削り出された外底部は黒釉がかけられ、高台際は帯状に褐茶色を呈している。内側は、ロクロ目の凹凸が強く認められ、褐色で少し砂目の胎土が観察でき、内底部に降灰がみられる。別に胴上部の小片1がある。

この種の吉州窯産の黒釉玳玻瓶の類例は窯跡および消費地とも極めて少い。底径10.8cmから推定して、器高35cm程

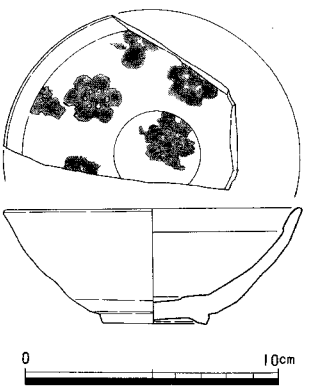


図 29　玳玻梅花文碗（鎌倉市、北条時房・顕時邸跡出土、鎌倉市教育委員会提供）

度で、最大径を胴部上位にもち、小口径の瓶と考えておきたい。鎌倉市若宮周辺遺跡群・雪ノ下１210遺跡（1988年鎌倉市教委・馬渕和雄氏ら調査）から同様な底部破片が鎌倉後半期の面から出土している。これに対して本品は、共伴土師器が少いとはいえ、廃棄年代を12世紀後半まで遡る可能性がある。

吉州窯産天目の出土例は数例あり、博多遺跡群においても、第35次 SD 056、SE 022 などから検出されている。このうち黒釉梅花文玳玻盞の出土例を参考までに紹介しておきたい（図29)。これは鎌倉市雪ノ下町の北条時房・顕時邸 YTA １面、P. 58 (No. 418) から出土したもので、口径11.8、底径4.1、高さ4.6cmをはかる。口縁は直口で、内側部分に少しふくらみをもち、高台は低く、粗雑に削り出されている。釉は褐茶色を呈し、腰部以下には暗赤茶色の下地塗りの部分がみられ、高台は露胎で、うすい褐灰色の素地である。全体の1/3ほどが遺存し、内面の梅花文の配列は、茶溜りの１花を中心として二重列にめぐらされているようで、１＋５＋６の12花である。このパターンは窯跡出土品にも見られる。

この他の出土例として、福岡市高速鉄道祇園町工区本体部Ａ区遺構外出土品で、玳玻盞２片（図・写真なし）がある。また第39次調査においては玳玻剪紙貼花（花文ヵ）碗の破片を検出している。この出土は第１面下の包含層であり、良好な出土状況とはいえない。

遺構の時期　土師器の出土数が少いが、貿易陶磁器の組み合せや、SK 56 井筒内および SK 55 の出土品を勘案すると、12世紀第Ⅲまたは第Ⅳ四半期とみることができ、遅くみても13世紀初頭までの時間内におさまると考える。

井筒内出土遺物　井筒内出土品は土師器が極端に少く、中国陶磁器が大部分を占めている。土師器は計測可能なものは無く、杯ａの小片が各１点ずつあり、いずれも

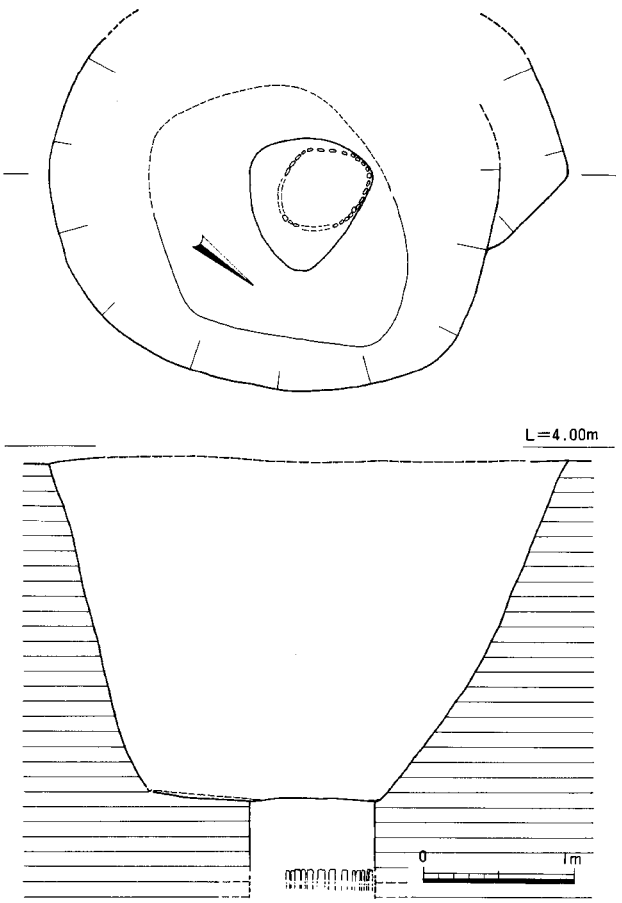


図 30　井戸 SE56 実測図

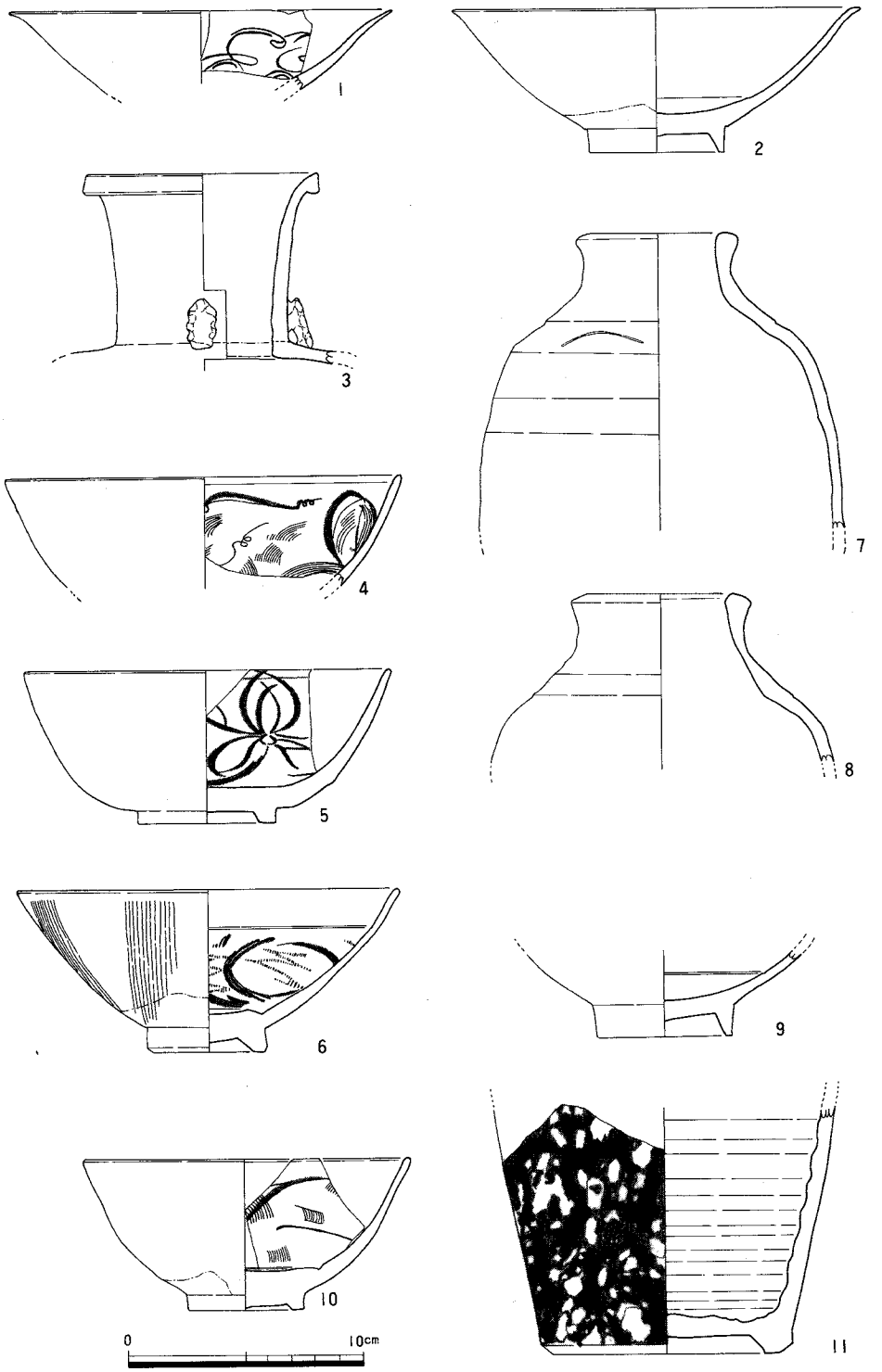


図 31　井戸 SE56 出土遺物　1～8 井筒内、9～11 掘方内

糸切り底であり、その他の土師器においてもヘラ切りは認められない。

つぎに白磁碗では2に示したⅥ－1や、Ⅳ－2の通有品がある。2は口径17.6、底径5.8、高さ6.2cmをはかり、失透性の灰白色釉が腰部までかかり、内底は圏線がめぐり、降灰がみとめられる。1は、内側面の釉下に花文様が刻線で施文されている。復元口径16.2cmで、開きの大きい平茶碗形であり、器壁は薄く、口縁を輪花とし、灰白色の透明釉がかけられている。遺存部分内では櫛の施文具はみられない。類似の白磁碗が他に1個体ある。3は白磁四耳壺の口頸部で、10.0cmの口縁径をはかり、花文のメダリオンを対にして貼付している。釉は白灰色で少し青味をおび、胎土は一部に焼成不十分の褐色を呈する。この他に白磁は認められない。

青磁では碗形品のみが検出され、4は龍泉窯系Ⅰ－4で、内側面に細線で蓮華唐草文を刻み、浅く陰影を付しており、いわゆる片切り彫りではなく、細かい櫛で空間をうめている。外面のみに氷裂が暗黄緑色の釉上にみられる。5の青磁碗も通有品で、龍泉窯系Ⅰ－5に属する。釉は透明度が強く、光沢をもち暗緑色に発色し、氷裂が内外面ともみられる。露胎の高台内に焼台痕の黒色の焦げ跡が付着している。

6は同安窯系碗Ⅱ類で、胎土は白褐色で軟質の感がするが、釉は黄緑色によく呈発している。同安窯系碗ではⅠ類とみられる外側面に粗い櫛描文を入れる小片が出土している。ただこの小片（体部下半）の内外面にはゴマ大の降灰が大量に付着し、使用に堪えない状態である。この他に青磁碗、皿はみとめられない。

陶器では、7、8がほぼ同形の褐釉小口瓶である。同じ特徴をもち、残存部分の内外ともに施釉され、緑灰色で一部は茶色に呈発し、8では越州窯青磁に似た暗緑色の釉色部分がみられる。口縁部に灰砂が全周にわたって付着し、一部に他器の破片が付着し、重焼きを示している。胎土はともに黒灰色で、須恵器に似ている。7の肩には波状線が一弧のみ見られる。全体として粗製の瓶ではあるが、釉色、胎土、焼成方法などをみると、越州窯青磁との関連を推定させるところがあり、あるいはこの瓶の生産窯が奈辺にあることを示唆しているのであろうか。

この他の陶器では黄釉鉄絵深鉢（復元口径52cm）の口縁部破片と、褐釉陶でT字形の大甕の陶片が数片ある。この褐釉陶片は一面に大きな青海波文があり、ほとんど平板の大形品で、かつ内外面とも高熱を受けて2次的融解状態にある。さらにこの他に、大壺とみられる胴部片で、外面は緑灰色釉、内面は茶色釉を塗布したものがある。

遺構の時期　土師器の出土が少いので決め難いが、貿易陶磁器の組み合せをみると、12世紀の前半に遡ることはなく、後半から13世紀初頭とみたい。

井戸 SE 66（図32・33）

調査区北側にあり、東壁に接しているため、全体の約半分の調査に留まった。検出面は標高3.8mであり、直径約2mの円形の掘方をもち、深さは2.8mあり、井筒などは未検出である。

下面は平坦におわる。

出土遺物　土師器のうち器形の半分以上を遺存するものは、小Ⅲａで34個、杯ａでは24個がある。すべて糸切りで、板状圧痕―ナデ調整である。表１参照。

小Ⅲａの口径は、8.1～9.4cm（平均8.79cm）、器高は0.9～1.4cm（平均1.06cm）、底径は6.0～8.0cm（平均7.33cm）である。口径においては、9.0cm以下のものが70％以上を占めている。器形は１のように体部が外反するのはこの１点のみで、他は２～４の形態である。４のように内底外周に凹線をめぐらす形もみられる。

杯ａの口径は、13.7～16.1cm（平均14.8cm）器高2.2～3.9cm（平均2.9cm）、底径9.9～13.9cm（平均11.9cm）である。口径において14.5cmを境にして２分すると両者は相似た個数であり、小型化の始まった時期の所産といえよう。形態においては、６・７のように外反度の強い形と、５・８のように直線的ないし内弯傾向の形態とがみられる。これらは、いずれも内底のナデは強く、従って板状圧痕も深くつけられており、また外底と体部との境も明瞭である。

この他に国内産土器類では、瓦器椀口縁部、緑釉椀底部、滑石製鍋、同再加工の直方体品などがある。

次に、陶磁器類についてのべる。白磁碗のⅥ－１、Ⅳ－２、高台付皿Ⅵ－１、Ⅱ、平底皿Ⅲ、四耳壺頸部などを確認できる。図示した10は白磁平底皿Ⅵ類で、内底に片切彫りで花文を入れ、釉は白灰色で、釉だまりでは黄灰色を呈している。底部に糸切り痕がみえ、砂が付着している。11の白磁碗はⅨ類に属するものであろうか。直線的に延びる体部、直立し、鋭く削り出された高台をもち、体部内面に白堆線で全体を６区に分け、見込みは重焼きのため円圏に釉を削り取る等の特徴をもっている。釉は灰白色透明である。口径16.6、底径6.4、高さ5.8cm、2/3を遺存する。

青磁では、12と13の龍泉窯系平底皿は興味ふかい対照をみせている。図にみるように、両者の法量はほぼ同じで、12と13の順序で示すと、口径は9.8と10.2、底径はともに3.4、高さは2.3と2.5cmである。形態においても体部に稜を入れて反転し、あげ底で露胎の底部を削るなど同形である。しかし子細に観察すると、両者は、12が精品、13は普通品（粗製品）の相違がある。その異る部分のうちすぐに気がつくのは内底の施文にある。12の双魚文は、細刻線と片切彫りを巧みに併用し、魚の各部分を丁寧に表現してい

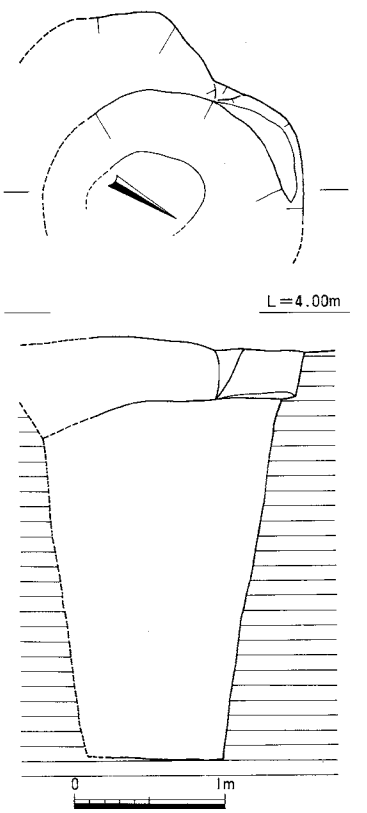


図 32　井戸 SE66 実測図

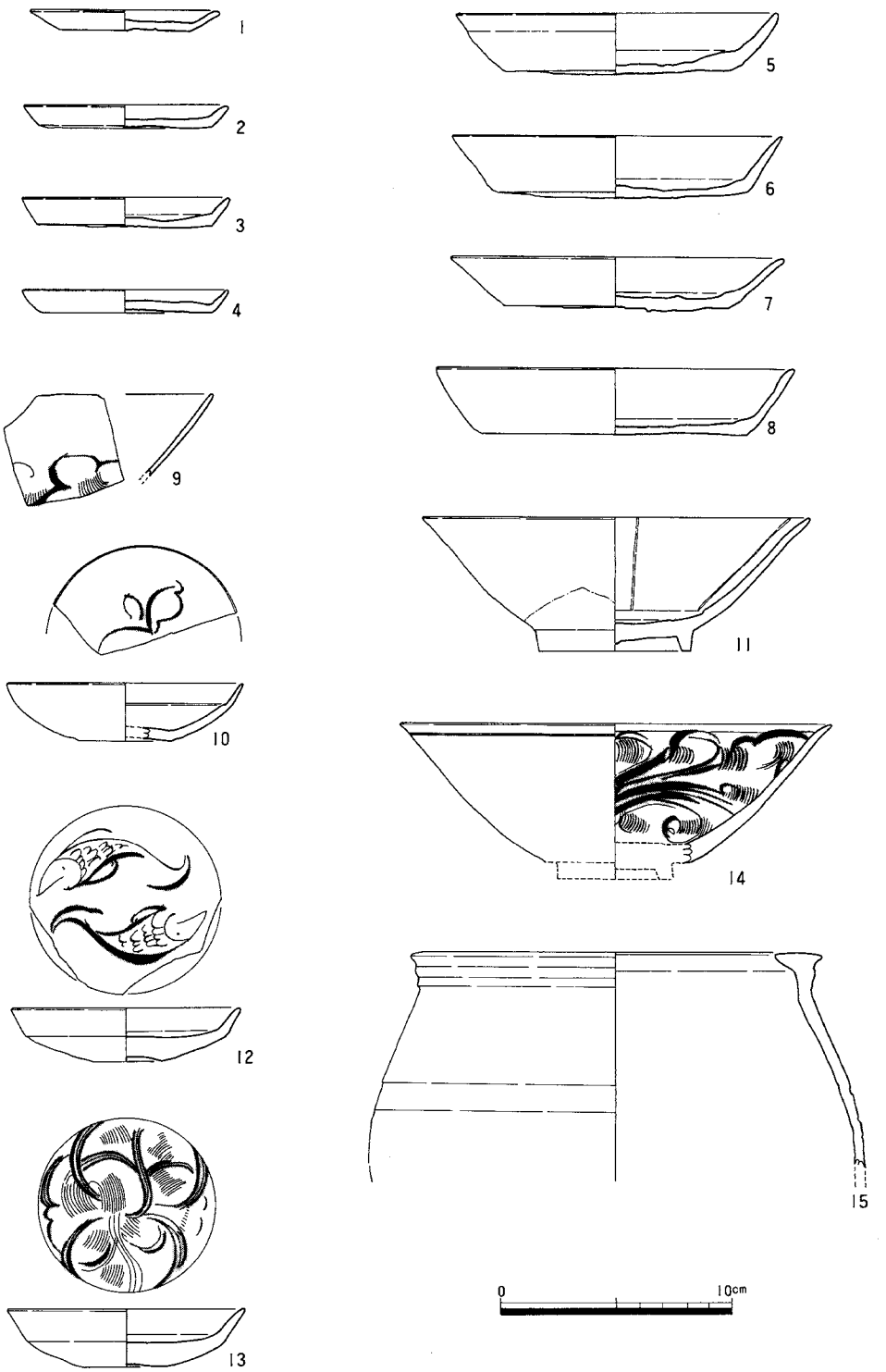


図 33　井戸 SE66 出土遺物

る。鱗の刻線も、一片一片が互に重なりあうことなく丁寧であり、動きのある尾の表現は、草色の釉とあいまって、水塘の多い龍泉県の水辺を遊泳する双魚を想起させる。これに対して13の内底の文様は、彫りが浅く不鮮明で、おそらく牡丹文を表現したのであろうが描写が既に実物から離れて頭の中につくられた文様である。さらに、12には見られない櫛を多用し、空間をうめる手法である。

このように施文は明らかに異るが、もしこの点だけならば、製品の精粗のちがいと言うより、文様の巧拙の相違と言った方がよいであろう。しかし、一見同じようにみえる器形のうち、底部の仕上げ方法においても両者は相違をみせる。12の底部は茶色に発色し、恐らく鉄釉がつけられ、かつヘラ磨きがされている。これに対し13では胎土と同じ灰色の素地のままで調整はされずザラザラである。すなわち、この平底皿の場合における製品の精粗は、成形段階に至るまではほとんど同じであるが、施文と仕上げ（調整）の段階で別の配慮がされていることが推察できる。施釉も12がやや厚目にかけられているが、それ程大きな相異とはなっておらず、両者とも若草（豆青）色で光沢をもつ美しい発色をみせている。なお露胎の両者の外底部に直径2.4cmの円圏状に黒焦げ跡があり、焼成時の塾圏（焼台）跡であるが、龍泉県山頭窯跡の発掘調査によって検出された塾圏の大・中・小のうち小形品の直径が2.4cmであることを付記しておきたい。

青磁碗14は龍泉窯系碗Ⅰ－２類に属するもので、口径18.6cmとやや大形であるが、器壁は薄く、鉢状に直線的にのびている。特徴的な施文は、片切彫りと櫛文を併用し、力強い表現がみられる。暗黄緑色を呈する。この他に青磁では、龍泉窯系碗Ⅰ、同皿Ⅰ、同安窯系碗ⅠとⅡ類を検出している。

最後に雑釉陶器では、Ａ群とみられる水注の注口部、Ｂ群の四耳壺と、図示した15の茶色釉甕がある。これは鉄分の多い灰茶色の胎土に茶色釉が薄くかけられているが、一見焼締め陶のようである。Ｔ字形口縁で、横ナデ調整痕を残し、かつ内面には同心円文の受具跡がはっきりと残っている。口径17.7cmである。

この他の出土品では鉄釘３本を検出した。いずれも頭部を折り曲げ、断面が方形で、うち２本は先端を欠損しているが長さ３寸程度で、一辺は５ミリの角釘である。他の１本は一辺２ミリ、１寸程度の長さの小形釘である。

遺構の時期　土師器のうち杯ａは、小型化が始まった時期とその直前とが相い半ばしている状況とみられ、また小皿ａでは口径が9.0cm以下のものが多くを占めている。こうした土師器の状況と、陶磁器の組み合せ、とくに龍泉窯碗Ⅱ類がこの遺構においても一片すら検出できなかった事を考えあわせると、この遺構の年代は12世紀第Ⅳ四半期に始まり、13世紀の第Ⅰ四半期に及ぶ時間幅を推定したい。

No.	器種	a	b	c	d	e	No.	器種	a	b	c	d	e	No.	器種	a	b	c	d	e	No.	器種	a	b	c	d	e
1	小皿a	8.7	0.9	7.1	○	○	16	〃	8.4	1.1	7.0	○	○	31	〃	9.0	0.9	7.6	○	○	11	〃	14.7	3.8	11.4	○	○
2	〃	8.5	1.2	7.1	○	○	17	〃	8.7	1.0	6.9	○	○	32	〃	9.0	1.2	8.0	○	○	12	〃	15.7	3.9	12.4	○	○
3	〃	8.1	0.8	5.7	○	○	18	〃	8.6	1.3	6.0	○	○	33	〃	8.6	1.0	7.0	○	○	13	〃	15.1	2.8	13.9	○	○
4	〃	8.8	1.1	7.3	○	○	19	〃	9.4	1.1	6.9	○	○	34	〃	8.7	1.4	7.1	○	○	14	〃	14.7	2.9	12.1	○	○
5	〃	9.4	1.2	7.7	○	○	20	〃	8.4	1.1	6.4	○	○		平均	8.79	1.06	7.33			15	〃	16.1	2.7	12.5	×	×
6	〃	9.2	1.3	7.1	○	○	21	〃	8.4	1.0	7.4	○	○	1	杯a	14.9	3.1	10.2	○	○	16	〃	15.7	2.5	12.7	○	○
7	〃	9.0	0.9	7.9	○	○	22	〃	9.0	1.2	7.2	○	○	2	〃	15.4	2.9	11.5	○	○	17	〃	15.8	2.9	9.9	○	○
8	〃	8.5	1.2	7.0	○	○	23	〃	9.3	1.2	7.5	○	○	3	〃	14.1	2.7	11.0	○	○	18	〃	14.8	2.7	10.9	○	○
9	〃	8.6	1.2	7.2	○	○	24	〃	8.6	1.1	7.1	○	○	4	〃	14.4	2.2	9.9	○	○	19	〃	14.2	3.2	10.2	○	○
10	〃	9.1	1.2	6.8	○	○	25	〃	9.1	1.0	7.8	○	○	5	〃	14.4	2.8	12.2	○	○	20	〃	14.4	2.8	11.0	○	○
11	〃	8.9	1.1	6.8	○	○	26	〃	8.2	1.4	6.8	○	○	6	〃	15.4	2.9	10.5	○	○	21	〃	14.0	2.8	12.8	○	○
12	〃	8.4	1.2	6.4	○	○	27	〃	8.9	1.4	7.5	○	○	7	〃	13.7	2.7	11.5	○	○	22	〃	14.6	2.7	13.9	?	?
13	〃	8.7	1.0	7.0	○	○	28	〃	8.9	1.3	7.3	○	○	8	〃	14.5	2.8	11.7	○	○	23	〃	14.0	2.5	12.4	○	○
14	〃	8.9	1.1	7.5	○	○	29	〃	9.0	1.2	7.1	○	○	9	〃	15.5	3.1	13.1	?	○	24	〃	14.8	2.8	13.1	○	○
15	〃	8.9	1.0	7.5	○	○	30	〃	8.6	1.1	7.5	○	○	10	〃	14.5	3.2	12.0	○	○		平均	14.8	2.9	11.91		

表 1　井戸 SE 66出土の土師器計測表（a：口径、b：器高、c：底径、d：内底ナデ、e：板状圧痕）

井戸 SE 70（図34・35）

調査区北側にあり、検出面は標高約3.7mである。平面は南北に長い楕円形で、南北2.7m、東西2.2mを測る。深さは1.9mで、底面はほぼ平坦である。井筒は検出できなかった。上半部から多量の遺物を検出した。

出土遺物　土師器は杯、皿など約300片を検出したがこれらはすべて糸切りである。杯aは72片を計測し、口径の最大19.0、最小13.0cm、平均値は15.4cmをはかる。器高は2.2～3.3cmの範囲で、平均値は2.6cm。口径14.5cmを境にして、これより大きい法量をもつものは54片、これ以下は18片であり、前者が杯aの法量の主流を占めている。1、2の口径は各々15.2と15.0cmで、底部は糸切りで板状圧痕がみられる。3、4も同様な手法であり、口径は各々14.5、14.4cmである。表2参照。

土師器小皿aの口径は8.1～9.8cmの範囲内で平均は8.99cmである。計測資料100片で、そのうち口径8.8～9.3cmの範囲内に60片が集まっている。器高は平均1.04cmである。5～8の小皿のうち、5は内底中心に径9ミリの凸起、6は同じく位置にヘソ状の凹みがみられる。7は口径がやや大きく9.7cm、8は体部の外反のつよい形である。9は大杯cに属する形で、内外とも赤褐色を呈し、内底はナデで他はヨコナデ、底部に糸切り痕がみられ、口径20.8、底径14.4、高さ4.4cmをはかる。

瓦器では11の椀は内面にミガキ跡がわずかにみられるが不明瞭である。10の小皿は、瓦器質であることに疑いないが、内外ともミガキ跡は認められない。内底は中心にヘソ状凸起でナデ調整、体部はヨコナデ、外底は糸切りで板状圧痕がわずかに観察できる。つまり土師器小皿aと何ら異るところがない製作技法で、法量も径9.6、高さ1.6cmと類似するが、瓦質である。類似の破片が少くとも他に5個体分を検出した。他に東播系鉢片がある。

以上、土師器等の年代は12世紀第Ⅳ四半期に中心をおいている。

陶磁器については、白磁の碗Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ－1類、高台付皿Ⅱ類、平底皿Ⅵ類、青白磁合子蓋がある。12は高台付皿で、内底を蛇目状に釉を掻き取って重ね焼きにするもので、高台の端部にも砂の付着がみえる。13は、平底皿Ⅵ類で、ヘラのみを用いて牡丹文を簡略化して表現している。灰色に近い釉で、釉だまりでは淡黄緑色を呈する。露胎の外底は褐色を呈している。口径11.9、底径3.9、高さ3.0cm。14の白磁碗は通有のⅥ－1類で、白色釉は体部外側では薄くかけられているため、胎土の褐色が透けてみえる。内底に圏線をめぐらすだけで文様はない。

青磁は、龍泉窯系碗Ⅰ、同平底皿Ⅰおよび同安窯系碗Ⅰ、Ⅱ類のいずれも小片を検出したが、龍泉窯系碗Ⅱ類（外面蓮弁文）は発見できない。

その他では、褐釉水注の把手部分、黄釉盤と、図示した黒釉碗15、16と、17の褐釉鉢がある。15は光沢のある黒釉の匙口部分の小片で、胎土は黒味をもつ灰色である。これに対して16の底部は別個体で、胎土が赤褐色であり、釉は褐茶色に発している。こうした特徴をもつ天目碗も、相当数みられる。17は、B群鉢に分類できるもので、暗赤褐色の陶胎に茶褐～灰褐色で失透性の釉が内・外にかけられている。口縁に沿って灰色砂の目痕がみられ、胴部下半にも同じような重焼きの目跡がある。口径14.4cm。こうした特徴をもつ鉢はすでに説かれているように、越州窯系の製品と共通するところがある。

この他に鉄片（約9×5cm）1があり、鍛鉄で、鉄鍋の可能性もあるが、湾曲度が小さい。

遺構の時期　土師器や陶磁器の組みあわせ状況からみると、12世紀の第Ⅳ四半期から13世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

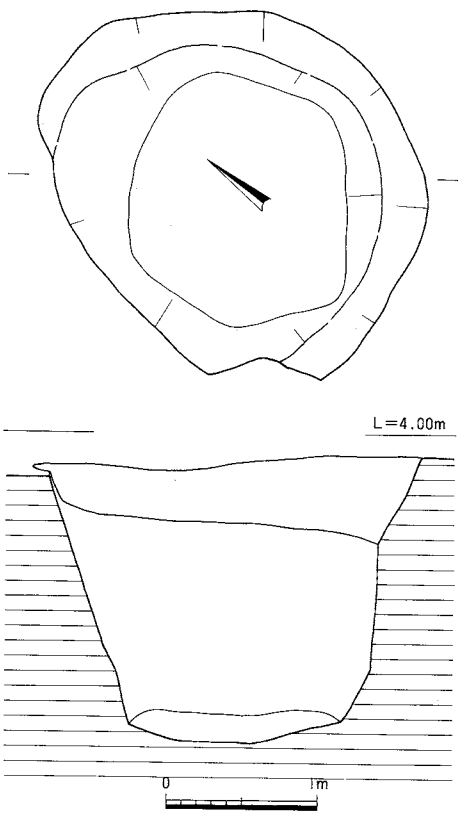


図 34　井戸 SE70 実測図

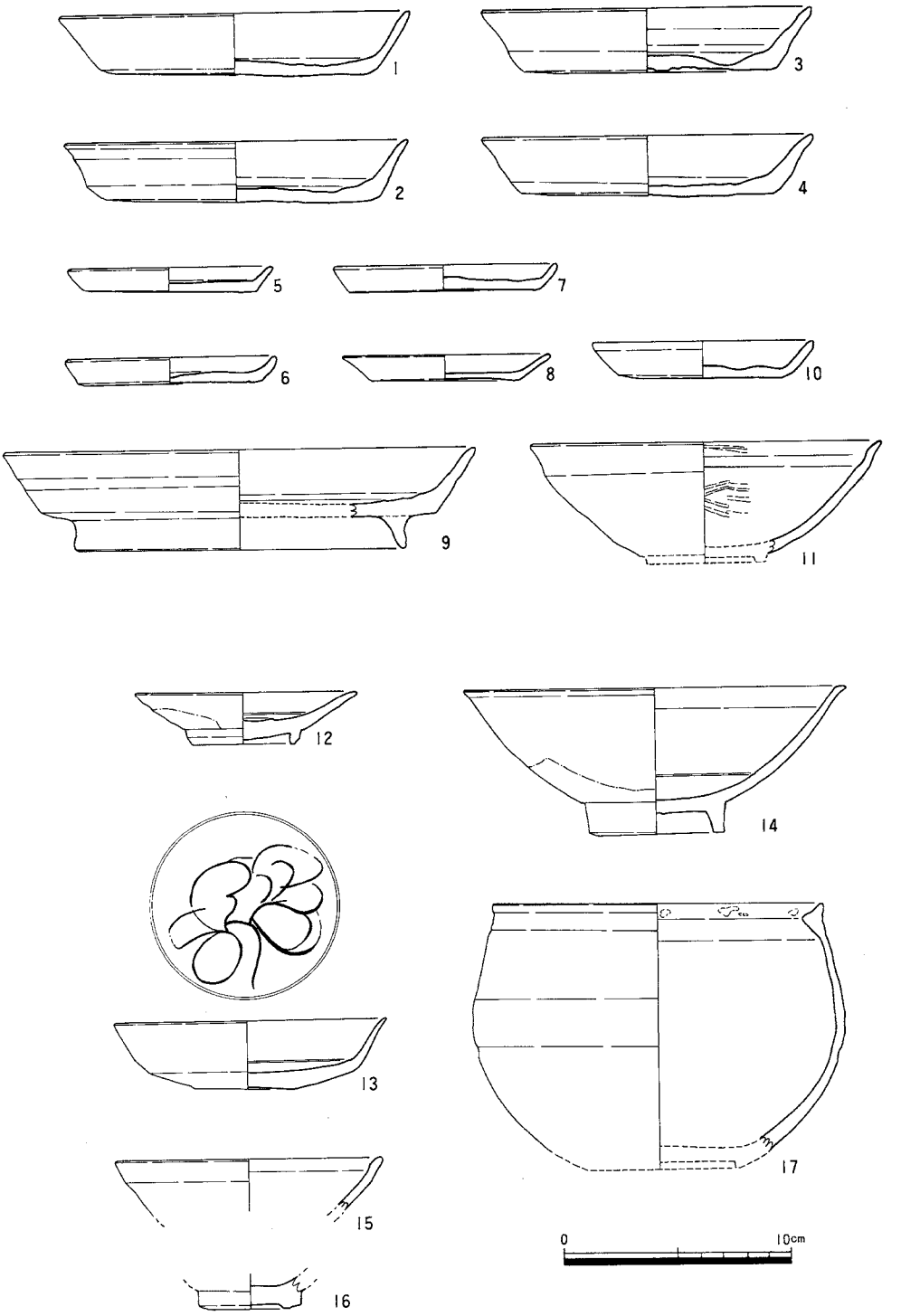


図 35　井戸 SE70 出土遺物

No.	器種	a	b	c	d	e
1	杯a	15.1	2.8	11.6	○	○
2	〃	15.0	2.7	12.1	○	○
3	〃	14.3	2.6	11.9	○	○
4	〃	14.1	2.6	11.0	○	○
5	〃	14.3	2.6	10.6	○	○
6	〃	15.5	2.7	11.5	○	○
7	〃	14.9	3.0	10.0	○	○
8	〃	15.3	2.9	11.4	○	○
9	〃	15.6	2.9	10.8	○	○
10	〃	16.0	2.9	10.2	○	○
11	〃	15.6	2.9	11.2	○	○
12	〃	14.6	3.0	12.0	小片のため不明	
13	〃	15.5	2.8	10.8	○	○
14	〃	15.0	2.7	11.4	○	○
15	〃	14.2	2.5	10.6	○	○
16	〃	15.3	3.3	10.2	○	○
17	〃	15.0	2.6	11.8	○	○
18	〃	15.0	2.7	11.8	○	○
19	〃	15.6	2.5	12.4	○	○
20	〃	15.2	2.9	10.4	○	○
21	〃	14.7	2.9	10.8	○	○
22	〃	14.7	2.9	11.0	○	○
23	〃	14.2	2.8	11.4	○	○
24	〃	14.1	2.9	12.2	○	○
25	〃	14.2	3.0	11.6	○	○
26	〃	14.3	2.4	12.2	○	○
27	〃	15.8	2.6	12.8	○	○
28	〃	16.0	2.4	12.4	○	○
29	〃	16.0	2.6	11.8	○	○
30	〃	14.0	2.6	11.0	○	○
31	〃	13.9	2.2	11.8	○	○
32	〃	16.4	3.0	14.0	○	○
33	〃	15.4	2.4	11.8	不明	○
34	〃	15.0	2.7	11.0	○	○
35	〃	15.0	2.7	11.6	○	○
36	〃	14.0	2.7	10.0	○	○
37	〃	15.0	2.6	13.0	○	○
38	〃	14.6	2.9	11.8	○	○
39	〃	13.4	2.5	11.6	○	○
40	〃	16.4	2.4	12.8	○	○
41	〃	15.2	2.8	11.2	○	○
42	〃	13.0	2.8	10.6	○	不明
43	〃	16.0	2.2	13.8	不明	○

No.	器種	a	b	c	d	e
44	〃	15.7	3.1	10.8	小片のため不明	
45	〃	19.0	2.7	11.0	○	○
46	〃	14.6	2.6	12.0	○	○
47	〃	16.0	2.7	10.0	不明	○
48	〃	16.0	2.3	11.4	○	○
49	〃	14.0	2.6	10.4	○	○
50	〃	16.8	2.9	10.2	○	○
51	〃	15.6	2.9	12.6	不明	○
52	〃	14.8	2.9	10.6	○	○
53	〃	15.4	2.8	12.8	○	○
54	〃	18.1	2.9	15.4	○	○
55	〃	15.4	2.7	11.4	○	○
56	〃	17.2	2.8	12.6	小片のため不明	
57	〃	14.6	2.5	10.4	○	○
58	〃	17.0	2.9	13.0	○	○
59	〃	14.4	2.6	11.4	不明	○
60	〃	16.8	3.1	10.8	○	○
61	〃	17.2	2.5	14.0	○	不明
62	〃	16.4	2.8	12.4	○	○
63	〃	15.6	2.5	12.2	不明	○
64	〃	17.0	2.8	14.4	○	○
65	〃	18.6	2.5	15.2	不明	○
66	〃	14.8	2.4	12.0	小片のため不明	
67	〃	15.0	2.4	12.0	不明	○
68	〃	14.8	2.6	11.0	○	○
69	〃	18.8	2.7	10.2	○	○
70	〃	16.2	2.6	11.8	○	不明
71	〃	15.8	2.8	11.2	○	○
72	〃	14.4	2.9	11.0	○	○
1	小皿a	8.9	1.0	7.6	○	○
2	〃	9.4	1.0	7.8	○	○
3	〃	8.8	1.3	7.4	○	○
4	〃	9.0	1.1	7.7	○	○
5	〃	8.5	0.9	7.2	○	○
6	〃	8.9	1.1	7.2	○	○
7	〃	8.8	0.8	7.7	○	○
8	〃	9.0	1.1	7.0	○	○
9	〃	8.8	0.9	7.2	○	○
10	〃	9.1	1.0	7.9	○	○
11	〃	8.5	1.2	6.4	○	○
12	〃	9.0	1.0	7.6	○	○
13	〃	9.0	0.9	7.6	○	○
14	〃	9.2	1.1	7.7	○	○

No.	器種	a	b	c	d	e
15	〃	9.1	1.1	8.0	○	○
16	〃	9.0	1.1	7.5	○	○
17	〃	8.9	0.9	7.7	○	○
18	〃	9.1	1.0	7.5	○	○
19	〃	9.1	1.1	7.1	○	○
20	〃	8.6	1.2	7.3	○	○
21	〃	9.1	1.0	7.6	○	○
22	〃	9.1	1.2	7.8	○	○
23	〃	9.1	0.9	7.5	○	○
24	〃	8.6	0.8	7.2	○	○
25	〃	9.1	0.8	7.3	○	○
26	〃	9.1	1.1	7.5	○	○
27	〃	8.8	1.0	7.2	○	○
28	〃	9.2	0.9	8.0	○	○
29	〃	9.0	1.2	7.5	○	○
30	〃	9.1	0.9	7.5	○	○
31	〃	9.3	1.1	8.0	○	○
32	〃	8.5	1.1	7.5	○	○
33	〃	9.0	0.9	7.6	○	○
34	〃	8.8	0.8	7.5	○	○
35	〃	9.6	1.1	7.4	○	○
36	〃	8.3	1.1	6.7	○	○
37	〃	8.6	1.1	7.3	○	○
38	〃	9.4	1.1	7.7	○	○
39	〃	8.7	1.0	7.6	○	○
40	〃	8.5	0.9	6.0	○	○
41	〃	9.1	1.0	7.2	○	○
42	〃	8.6	1.0	7.0	○	○
43	〃	9.5	1.0	8.1	○	○
44	〃	8.7	0.9	7.2	○	○
45	〃	9.3	0.9	7.4	○	○
46	〃	8.8	1.0	7.3	○	○
47	〃	9.0	1.1	6.8	○	○
48	〃	9.1	1.2	7.9	○	○
49	〃	9.0	1.0	7.8	○	○
50	〃	8.6	1.2	6.7	○	○
51	〃	8.9	0.8	7.6	○	○
52	〃	8.4	1.0	6.5	○	○
53	〃	9.0	0.9	7.4	○	○
54	〃	9.2	1.0	8.1	○	○
55	〃	8.2	1.3	6.0	○	○
56	〃	8.3	1.2	6.9	○	○
57	〃	8.2	1.1	7.6	○	○

No.	器種	a	b	c	d	e
58	〃	9.1	1.2	7.1	○	○
59	〃	9.2	1.2	7.8	○	○
60	〃	8.7	0.9	7.4	○	○
61	〃	8.9	1.1	6.7	○	○
62	〃	8.2	1.3	6.4	○	○
63	〃	8.7	1.2	7.5	○	○
64	〃	8.7	1.0	6.3	○	○
65	〃	9.0	1.3	7.1	○	○
66	〃	8.6	1.1	7.7	○	○
67	〃	8.8	1.0	7.3	○	○
68	〃	9.1	0.9	6.1	○	○
69	〃	8.3	1.1	6.6	○	○
70	〃	8.5	1.0	7.6	○	○
71	〃	9.5	1.6	6.3	○	○
72	〃	8.8	0.9	7.3	○	○
73	〃	8.8	1.1	7.1	○	○
74	〃	9.8	0.8	7.9	○	○
75	〃	9.1	0.9	7.4	○	○
76	〃	9.2	0.9	7.8	○	○
77	〃	8.9	1.1	6.3	○	○
78	〃	8.7	1.0	8.0	○	○
79	〃	9.2	1.0	7.2	○	○
80	〃	8.7	0.8	7.1	○	○
81	〃	8.8	0.9	7.0	○	○
82	〃	9.2	1.4	7.6	○	○
83	〃	9.2	0.8	7.8	○	○
84	〃	8.7	1.0	7.2	○	○
85	〃	9.6	1.1	7.9	○	○
86	〃	9.3	1.2	7.5	○	○
87	〃	8.5	1.0	7.1	○	○
88	〃	9.0	1.0	7.8	○	○
89	〃	9.2	0.9	8.2	○	○
90	〃	9.3	0.9	8.1	○	○
91	〃	8.7	1.1	7.1	○	○
92	〃	8.9	1.1	7.0	○	○
93	〃	8.6	1.2	7.3	○	○
94	〃	9.1	1.0	8.2	○	○
95	〃	8.6	0.9	6.8	○	○
96	〃	9.3	1.3	8.2	○	○
97	〃	9.0	1.2	7.6	○	○
98	〃	8.8	1.0	7.4	○	○
99	〃	8.1	1.0	6.9	○	○
100	〃	9.3	1.0	8.2	○	○

表 2　井戸 SE 70出土の土師器計測表（a：口径、b：器高、c：底径、d：内底ナデ、e：板状圧痕）

Ⅳ．SK 227出土の赤色顔料について

博多遺跡群第36次調査 SK 227 出土の赤色顔料について、光学顕微鏡の観察と蛍光X線分析およびX線回折の測定を行ったところ、赤色顔料はベンガラであることが判明した。

試料

遺構内での赤色顔料部分は非常に少なく、赤色顔料だけの小塊は望めなかった。極力土砂を除き、一部を採り、プレパラートを作成した。残りをメノウの乳鉢で研和しX線分析の試料とした。

光学顕微鏡による観察

墳墓出土の赤色顔料としてはベンガラ（Fe_2O_3）、朱（HgS）が考えられる。これらは、特に微粒のものが混在しない限り、検鏡による識別が容易である。

光学顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡した所、赤色顔料としてはベンガラ粒子のみが認められた。ベンガラ粒子には種々の形状が知られている。その中で産地あるいは製造方法の違いを示すかも知れないと考えられているものがある。これはパイプ状粒子といわれているものであるが、今回の試料には含まれていなかった。

蛍光X線分析

以下の測定条件で蛍光X線分析を行った。装置；理学電機工業 KK 製蛍光X線装置、X線管球；クロム対陰極、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーションカウンター、印加電圧－印加電流；40KV－20mA、走査速度；2θ4°/分、時定数；0.5秒。赤色顔料の主成分元素としては、Fe が検出された。

X線回折

以下の測定条件でX線回折を行った。装置；理学電機工業 KK 製文化財測定用X線回折装置、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、検出器；シンチレーションカウンター、印加電圧－電流；27.5KV－10A、発散スリット；0.34°、受光スリット；0.34°、走査速度；2θ4°/分、時定数；2秒。赤色の由来となる主成分鉱物としては、Fe_2O_3 が同定された。

まとめ

以上の結果から、SK 227 出土赤色顔料はベンガラであり、朱は使われていないことがわかった。

V. まとめ

1）弥生～古墳時代

第5面で検出した甕棺群は弥生時代中期に位置付けられ、北部九州で展開する甕棺による「列状配置墓」「2列埋葬墓」の現時点での北限を示す資料となる。第4面の住居跡群は古墳時代初頭に位置付けられ、出土遺物は布留式最古段階を含む資料である。SC 276 の二群、SC 277 の一群の遺物の編年的位置を含めたこの近畿系搬入土器の性格については別に述べたい。

2）古代～中世

この時期の遺物量は多く、その全てについて精査することはできなかったが、概観して次の2点を指摘しておきたい。

1．今回検出した遺構のうち、都市復元に大きな意義をもつのは SD 224 である。すでに述べたように、この溝は9世紀前半期には開削され、時間の経過とともに少しずつ浅くなり、12世紀の初めまでには完全に埋没したと思われる。しかし、この溝と時間的には少し重複して、11世紀中葉ごろに上層に新しく SD 50 が掘られている。幅も深さも小規模となったが、12世紀の中葉頃まで存続している。これらの溝の方向はN－22°－Wで、第17・20次調査の SD 529 と SD 466の方向と完全に一致している。しかも今次調査で、これらは9世紀前半まで遡ることが判明し、蓋然性の高まりつつある博多「官衙」遺跡に関係する施設と考えられる。

2．今次調査で検出した井戸、土壙等の多くは、12世紀の第Ⅲないし第Ⅳ四半期に中心をおき、13世紀初めを下限としている。注意されるのは、この時点から最上層の17世紀後半までの約450年間の遺物がほとんど認められないことである。すなわち、この期間、この地点では人々の生活の痕跡を見い出すことができない。

周辺の既調査区、例えば第33次、25次、59次などにおいても、今次ほど極端ではないが、13世紀以降の遺構が激減する傾向がみられる。つまり現祇園町交差点南ブロック（図3参照）は、12世紀までは人々の活動が盛んであったが、その直後から何らかの理由によって、居住空間としての役割が急速に衰潮し、生活の中心が東や北側へ移動したことが想定できる。

博多の中心が南東から北東方向へ、すなわち博多浜から沖の浜へと移動したと言われてきたが、こうしたマクロな概説よりも、個々の調査区の盛衰をこまかく追跡することで、より豊かな歴史認識を得られるであろう。

博 多 13－博多遺跡群第36次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第228集／1990年3月31日

発行：福岡市教育委員会／印刷：福岡印刷株式会社